序 戸水寛人先生述

稲垣伸太郎君

滿洲の話

東京
白山黒水社藏版

戸水寛人先生序
稲垣伸太郎君述

滿洲の秘話

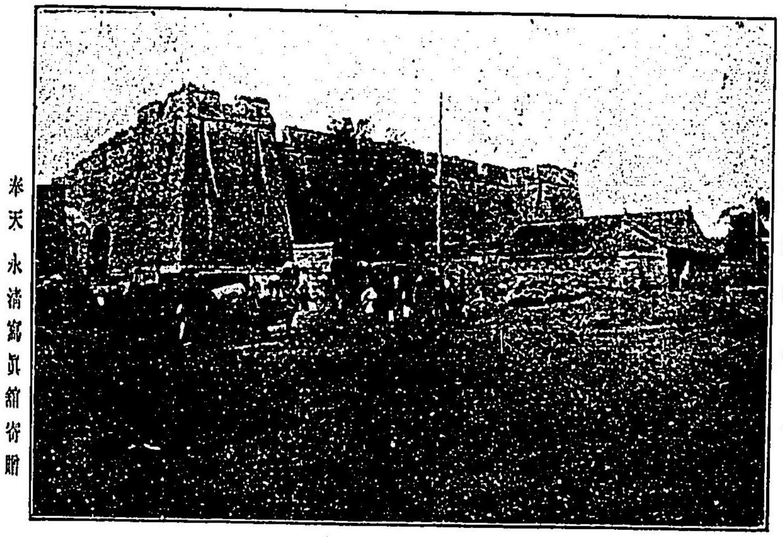
明治
37 5 2
内交

東京 白山黒水社發行

奉天永清寫眞館寄贈

奉天總督兼吉林將軍增祺氏

奉天總督衙門

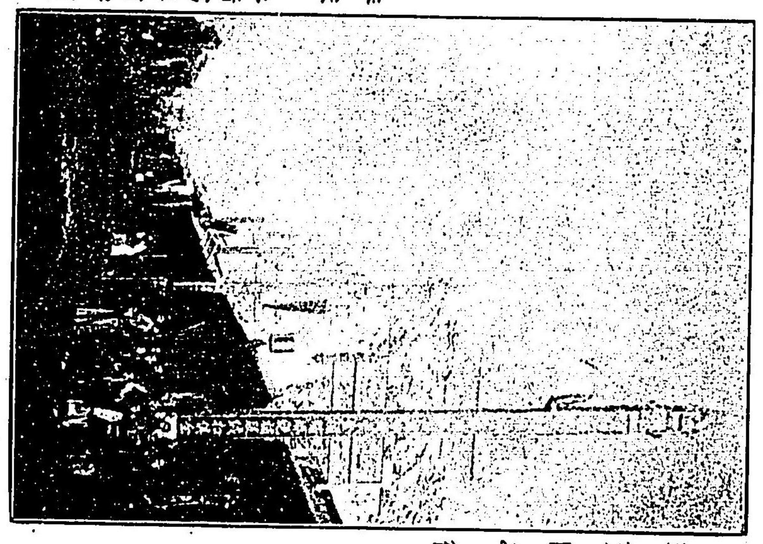


奉天城外の景

奉天 永清寫眞館寄贈

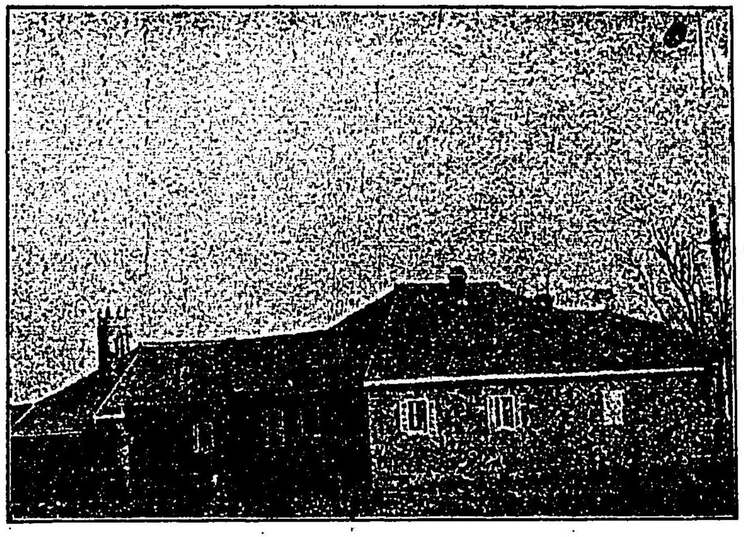
青泥窪公園

青泥窪
森村寫眞館寄贈



奉天四平街

奉天
永清寫眞館寄贈

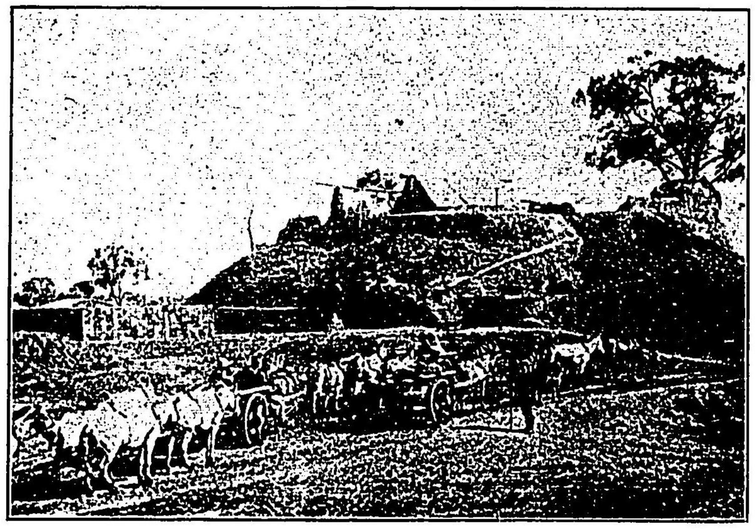


牛莊帝國領事館

營口露軍練兵

牛莊川崎良三郎君寄贈

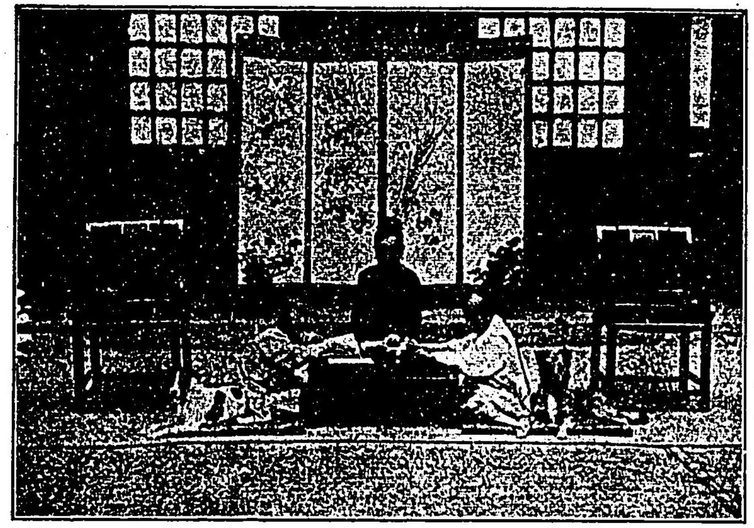
滿洲田園の景



其一

其二

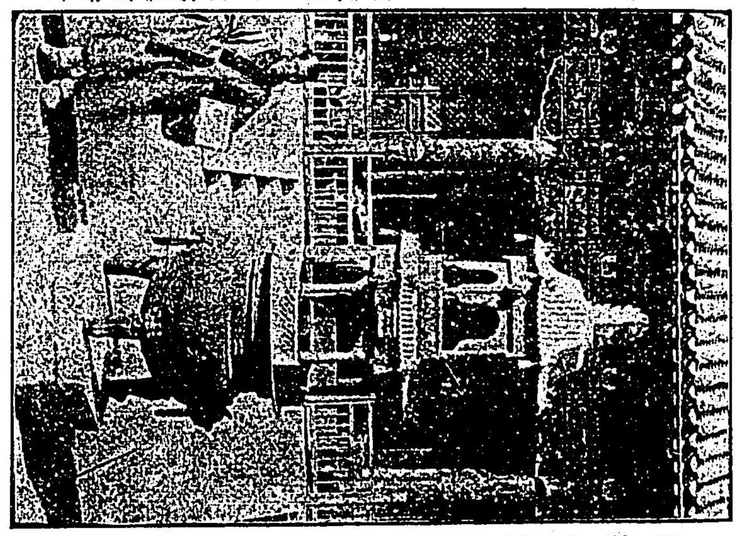
旅順口　前田寫眞館寄贈



在奉天英人設立盲啞學校

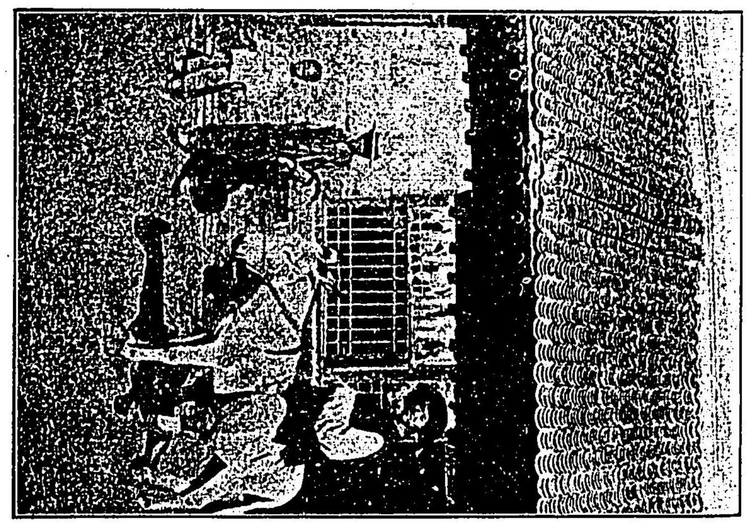
在金州露人設立露語學校

旅順口　前田寫眞館寄贈

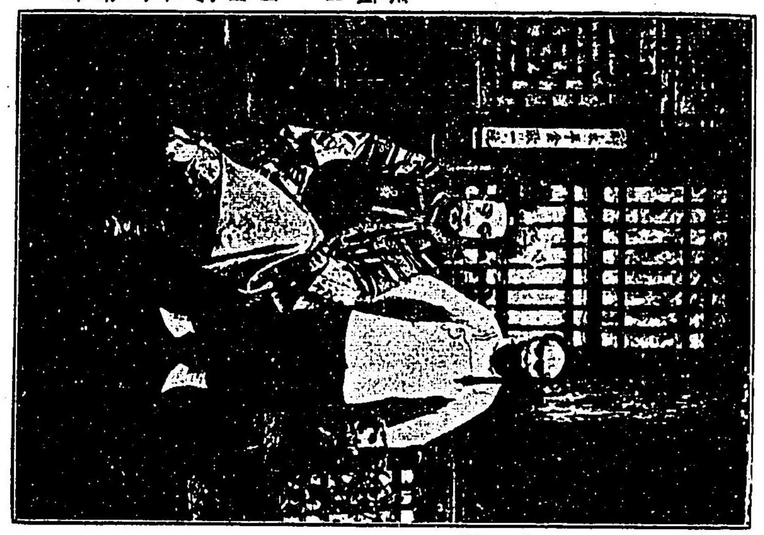


旅順口
柳田
寺内
満鉄
総督

滿洲の偉人

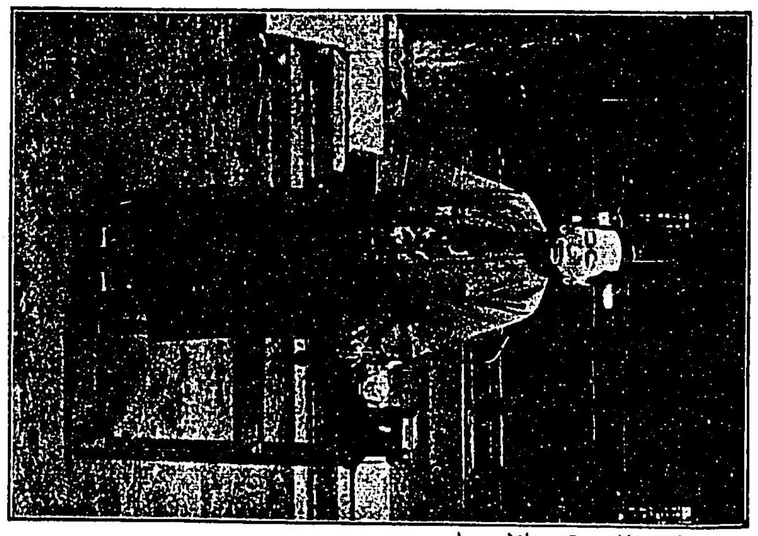


滿洲の偉人



旅順口
朝日新聞社
寄贈

滿洲の俳優



滿洲の婦人

序

朝野の有識にして善く滿洲問題を論議する者は之れ有り、眞に滿洲を了解せる者に至りては幾ど之れ有らざるに似たり。是を以て斗室圖を按じ筆舌を弄する者、徒らに空論高議に馳せ以て快を一時に取るに過ぎざるのみ、世を誤るや蓋し鮮しとせざる也。木莽稻垣子蚤に露學を攻め、數〻韓山露水の間を跋渉し頗る得る所あり、去歳復た滿洲に抵り備さに其實情を視察し、歸來稿を屬して成る所即ち此書、予受けて之を讀むや、通都廣邑冠裳輿馬の習俗より、絶巖窮谷雲煙草木の變態に至る迄、叙して審かならざるは

莫く、論じて中らざるは莫く、特に露國の民政軍事經濟に關する一切の規畫經緯を詳說する邊は、最も著者の擅場を見るべし　一部「滿洲の話」區々の小册子に過ぎずと雖も、邦人の據りて以て滿洲の實勢を知らんと欲する、則ち優に餘師ありとせん、之を序と爲す。

明治三十七年四月

戸水寛人

自序

滿洲の我れと相關する一日に非ず、而して世遂に滿洲を知るの稀れなる、是れ以て憾むべからずや。予やもと滿洲の事情に於ける、世の所謂通者を以て自ら任ずる者に非ざるも、而も東方に於ける露國活動の局面は就きては、年來多少の講究を經る所、客秋第三次期撤兵に際し、亦實は一たび滿洲の地を踏破し、聊か自得せる所無きに非ず、通者は則ち稍〻僭越に類すこせんも、亦た必ずしも其資格に非ずと謂ふべからず。歸來乃ち述作に從ふて成れるもの、嚮には則ち三百萬分一滿洲全圖あり、近時紛々たる幾多滿洲地圖中は就き些か出色を以て目せられ、世は布く未だ大に遍きに

至らずと雖も、識者は則ち其志を諒としぬ、今や繼ぐよ此書を以てす、天下の如何よ之を迎ふるやは、褒貶自ら讀者よ存すべきも、編著の微意は、則ち滿洲に關する一般の智識を國民に普及せしめんとて也。其題して「滿洲の話」といふ、亦唯だ讀んで字の如けんのみ、世人にして若し通俗滿洲演說或は滿洲入門の類を以て之を推する、復た毫も妨げある莫し。若し夫れ滿洲に關する詳細の記述よ至りては、今現に起稿中に在り、續出以て江湖に見ゆる、將に遠きに非ざらんす。「滿洲の話」成る、乃ち一言する所以。

甲辰四月

白山黑水社編輯樓上に於て　著者識

凡例

一、本書は予が旅行中の見聞を基礎とし、傍ら露人の滿洲に關する著書を參照して編述せりと雖も、記述は最も公平を旨とし、努めて斷定の誤らざるを期せり、讀者其意を諒して可也。

一、編中用ゆる貨幣度量衡等は悉く露國法に從へり、是れ勢自ら然らざるを得ざれば也、即ち留(ルーブル)は我約一圓、哥(カペーク)は我約一錢、露里は九町三十六間餘、サージェンは七尺〇二分、布(アード)度は四貫三百六十目、斤(フント)は百〇九匁等の如し。

一、地名は一々振假名を附するの便なるに如かずと雖も、煩雜を厭ひて唯だ其必要缺く可らざるものに限り、初出の場所に於てのみ之を附せり、而して通常漢音を以て一般に通ずる地名は、必ずしも此例に倣はず。

著者又識

目次

《位置及び形狀》《疆域》《面積と人口》《地勢》《山嶽》《河流》《冬の氣候》《夏の氣候》《住民と其稠度》《滿洲の種族》《滿人と漢人》《地味》《山林》《農産物》《野獸と禽鳥》《滿洲の觀光》《露滿境上の關門》《馬橋河》《磨刀石と牡丹江》《牡丹江の流域》《寧古塔と其街路》《横道河子の經營》《東北滿洲の山林》《東洋の小米國》《哈爾濱の一句》《邦民の自治團體》《蜃氣樓的市府》《舊哈爾濱》《新市街》《埠頭區》《商況一斑》《邦人の商業》《我商品の勢力》《哈市の製造業》《農業と牧畜》《哈市の人口》《物價》《勞働賃銀》《水陸の交通》《其統治機關》《必ず起るべき疑問》《紙幣政略の結果》《賄賂公行》《國民的急先鋒》《哈爾濱を發す》《長春途上》《吉長鐵道》《滿洲の舊都》《太廟に謁す》《現時の奉天》《滿洲の統治制度》《撤兵後の奉天》《武裝せる全權公使》《露語の勢力範圍》《滿人懷柔策》《滿洲に於ける露兵》《露國經營の炭

坑》《遼陽の地位》《露兵と日本人》《邦民の二系統》《日兵懷望》《牛莊への交通》《監禁的都市》《大石橋以西》《橋莊鐵道》《遼河の航權》《天然的モノポリー》《穀類運賃の低減》《遼河の勁敵》《秦皇嶋と牛莊港》《牛莊貿易の現況》《遼東半嶋に入る》《所謂關東州》《半嶋の咽喉》《大連灣と青泥窪》《旅順口と青泥窪》《青泥窪の偉觀》《旅順口の武裝》《安東縣と大東溝》《平和的侵略機關》《東清鐵道》《露清銀行》

滿洲の話

◎位置及び形狀

（北緯三十八度より五十三度の間に展擴す）

日露の斷交は古今未曾有の大激戰場と化したる滿洲の、世界に於ける位置はと問へば、東經百二十度より起つて百三十五度二十五分に終り、北緯三十八度四十分より起つて五十三度二十五分に終つて居るのである、即ち東西南北とも各〻十五度の間に展擴して居るのである。併し其形狀は極めて不正形を成して居て、西方より蒙古の一部が深く中央に迄突入せる爲め、丁度柘榴の成熟して皮殼潰裂し、子實の重きに堪へずして、枝より垂下せるが如きである、唯だ黑龍の長江が灣曲して東北境を流れ、稍〻其形狀を失する樣で

はあるが、若し葉に由つて其一部が蔽はれて居ると見れば、決して妨げ無きのみならず、一幅の滿洲圖は、直に是れ樹上の柘榴を寫生的に描き出したるものである。斯く滿洲は極めて不規則なる形狀を成せる爲め、東清鐵道の中央大停車場たる哈爾濱（ハルビン）の如きは、殆ど蒙古の境上に近く存在し、其鐵道の如きも、普通に滿洲鐵道とは謂ふものゝ實は蒙古の一部を貫きて敷設されてあるのである。滿洲は又其形狀に依り惡魔の巨口を開いて人を嚥まんとするが如くであるとも見ることが出來る。

◎疆域

（二千七百露里の延長を以て虎狼の國と境す）

滿洲はもと黑龍江（アムール）以南の地を總稱したものであるが、露國の勢力の東漸するに從ひ、次第に疆域を蠶食し來り、千八百六十一年即ち今を距る約四十餘年前に英佛同盟軍が支那を攻め、將に國都北京に逼つて城下の盟を爲さしめんとするに際し、露國が居中調停の勢に依り、其一半を分割して、烏蘇里江以東の地を收め、遂に滿洲北西より正北及び北東へ亘りて、實に二千七百餘露里の延長を以て虎狼の國と境することゝ爲つたのである、即ち柘榴の外殼に屬する總べての部分は、殆ど露國と疆域を接して居るといふも差閊無く、唯だ東南の一小部分のみ朝鮮に接壤して豆滿江鴨綠江の二水と長白山の連山とを以て限られて居るのである。外殼の他の部分即ち南方は黃海及び勃海であつて、露國絕東の二大策原地たる旅順及び靑泥窪は實に其海岸に立つて居

る、鴨綠江口よりして遼東半島沿岸を縫ひ、而して山海關に至る、延長固より長からずと謂ふにはあらねど、海岸線は寧ろ短小と謂は無ければならぬ。滿洲の西境は即ち柘榴の決裂せる部分であるが、其支那本部の一部と蒙古を以て境されて居ることは、說明を俟たず、地圖を繙く者の等しく知る所である。

◎面積と人口

（面積六十三萬方露里人口一千五百萬）

滿洲の面積は六十三萬平方露里で、之

を英里に換算すると二十八萬平方英里と爲る、即ち我邦の二倍半大である。人口は未だ戸口の調査が無い爲め、正確に知るとは出來ないが、約一千五百萬と稱されて居る、即ち我邦の三分一にしか當らないのである。我れよりも面積が廣くて人口が少ないのであるから、其分布の狀態は我邦と非常な相違であると謂はなければならぬ。今現在我人口の稠度の比例から言へば何うしても滿洲には一億以上の人口を包含することが出來る勘定である、其内現住民の一千五百萬を差引ても九千萬は慥に容れ得るのである、我邦の人口は年々四五十萬づゝ增加するといふから、其增加せる分丈けを年々滿洲へ送くるとしても、二百年間は人口增殖上の處分に就きて何等の憂慮をも要しないのである、滿洲の我が年々過剩しつゝある人口の排泄地として、優に其餘地の存して居るといふ一事は、我邦が滿洲に着眼すべき主もなる要點の一であらねばならぬ。

◎地　勢

（一半は北清と同一地帶、一半は黑龍の水域）

滿洲の地勢は其中央に山脊の規則正しき組織を有せる丘阜が蟠かまつて居て、滿洲を南北二個の全然相反對せる斜面に分つて居る、即ち北一半の斜面は黑龍江の流域に向ひてヲコツク海に迄達し、南一半は全く反對の傾向を取つて、河流は皆南走勃海及び黃海に注いで居る、故に滿洲の地勢は之を一の大なる屋根に比すべくして、たとへ其勾配は急ならざるにせよ、水流の傾向に由つて明に之を證することが出來る。而して此南北兩地は廣袤に於て北方は南方に五倍する地積を有するが爲め、其形は「へ」の字形を成して、反對の斜面は互に氣候、水利、動植物及び耕耘等の諸點に於て著しき相違があるのである、併し此等の相異れる特徵に就き、未だ世人の組織的に論究したる者無きは大に遺憾とする所である。斯く二個の相反せる地勢よりして、露西亞人中動もすれば說を爲す者は、地理學上の見解よりすれば、南一半は疑も無

く北清一帶の地と同一組織の中に這入るべきであるが、其北一半は露國の領土たる黑龍江の水域中に屬するものだと謂つて、滿洲の殆ど全部が地勢上何うしても露國の物で無ければならぬかの如くに呑込んで居る、隨分虫の好い話ではあるが、若し日露の戰爭にして微りしならば、それが永く眞理として認められねばなら無かつたかも知れないのである。戰爭は此點計りで見ても其効果の決して少くないといふ事が分る。

◎山嶽

（絶えて突兀の奇無く山勢如愚）

滿洲の地勢は到る處山であると謂つても善く、又到る處平地であると謂つても善い、其到る處平地であるといふのは、山嶽があつても絶にて突兀として秀拔なるものが無いからである、其到る處山であるといふのは、たとへ茫漠たる原野が數百里に連なるとも、皆多少の起伏を有して居るからである。北滿洲に於て山脈の重もなるものを擧ぐれば大小興安嶺であるが、其海拔能

く四千フートに達する峰は太だ稀れにして、且つ其傾斜が極めて緩慢なので、「山勢如愚」などいふ支那人の形容は、中々能く實際に寫されてある、唯だ南滿洲なる長白山脈は比較的奇拔に出來て居て、其高峰中には間〻七千フート以上に達するものがあるといふ事である。平野は北滿洲に於ては松花江（スンガリー）の流域を推さなければならぬが、滿洲に於て最も廣きは遼河の水域である、滿洲の舊都たる奉天（ムクデニ）府及び北清唯一の商港たる牛莊（ニュウチワン）は、此同一平野の中に存立して居るのである、滿洲には東清鐵道が丁字形を成して縱横に貫いて居るが、其南支線たる哈爾濱旅順間には隧道といふものが一つも無い、烏蘇里（ウスリー）地方より滿洲へ入るにはバグラニーチナヤ驛近くに三個の隧道がある、哈爾濱より歐露へ行くには興安嶺（ヒンガン）の隧道があつて頗る難工事であつたと稱されて居たが、隧道開鑿前迄はバグラニーチナヤの方も興安嶺の方も鐵道が山腹を蜿蜒して兎に角開通して居た所を見ると、其山は決して險峻のものでは無い、

要するに滿洲の山は其山裳遠く數十里に蟠まるが如き宏大なるものはあるが、一も高峻なるものが無いのである。

◎河流

（松花江と遼河との相反せる特徴）

滿洲を支配する重もなる河流は、北滿洲に於ては松花江あり、南滿洲に於ては遼河があるが、此二流は其特徴に於て全然反對の狀態に在る、即ち其方向から言へば、松花江は北流して黑龍江に注ぎ遼河は南流して勃海に朝し、其航運の便否より言へば、松花江は水勢漫々、小蒸汽船ながらも能く其上游一千露里なる伯都訥（ボドウネ）迄遡ることが出來るが、遼河は河底淺くして汽船の通航し得べきは僅に百露里內外に過ぎない、而も稍〻吃水の深い船になると滿潮の時を俟つに非ずば、河口に入ることが出來ぬ、而して松花江の水の淸澄して白色を帶び松花の名さへ負へるに反し、遼河は河水混濁して滿洲の小黃河なる異稱を受くるは、特徴中にても著しき相違と謂はなければならぬ、併し此兩

河が滿洲の發達に貢獻せる力は、却て遼河を以て松花江の上に在りとすべく、遼河は南向して流るゝ丈けに其水運は極めて便利を缺くに拘らず、滿洲の富源を開發するに於て至大の力を有して居るのである、若し松花江をして遼河と同じく太平洋に注ぐ河川であらしめしならば、滿洲は本部支那と同じく其發達必ずや大に見るべきものがあつたに相違無い。併し東淸鐵道の敷設は、此缺點を幾何か補ひ得るが爲め、其將來には決して憾み無いのである。

◎冬の氣候

（嚴烈にして動もすれば水銀の氷結を見る）

滿洲は之を同緯度の他の諸國と比較するに、其氣候は著しく寒冷である、是れ他無し、滿洲には冬季嚴烈の北風を遮蔽すべき高山峻嶽無きと、深く黃海の奥に引き込んで居るが爲め、臺灣より琉球諸島を經て對島海峽に入るべき暖流を距ることが甚だ遠いからとである若し緯度を以て之を我邦に比せば、旅順口は丁度岩手縣なる緯度觀測所の在る水澤町と餘りに違いが無い樣である

が、其温度は露國の著書に依ると、冬季攝氏の寒暖計で平均零度以下六度乃至七度半だと書いてある、尤も水澤町も最寒十七八度に下ることがあるといふが、旅順の方は平均温度が六度乃至七度半だといふから、隨分寒い勘定である、新聞に依ると防波堤築造の結果として、旅順も今年は結氷したといふ話である。滿洲の最北端なる松花江の黑龍江に注ぐ合流點に於て觀測せる所に依れば、同寒暖計にて零度下四十五度の寒氣に達し、大興安嶺の西北部に於ては、五十度に達するは珍しく無いといふことである、斯る地方に於ては水銀すら氷結することがある。牛莊の如きは勃海の奥に潜んで居るので、毎年十一月の末より三月の初迄は堅氷に封鎖せられて、殆ど全四個月間は蟄居の狀態に居なければならぬ事は、日清戰役に參加したる軍人の親しく目擊せる所である。總じて冬の滿洲は極めて嚴冷であつて、百物皆死せるが如しといふも不可無く、屋外に在る有らゆる流動物は悉く固結し、苟も水分を含める牛肉

魚類の如きも皆石の如くに氷合し、鑿以て之を鑿し鋸以て之を鋸くに非ずば庖刀を下だす事が出來ないのである。

◎夏の氣候

（北方尙能く瓜類を生じ牽牛花屋外に開花す）

併し夏の滿洲は冬季の嚴冷に反して、其温度は比較的高度である、同緯度に於ける露領亞細亞の平均温度と比べて見ても、滿洲の方は二三度位は暑氣が強いやうである、左ればとて蒙古内地に於ける砂漠的炎熱の影響を受くるものでも無い、要するに滿洲の夏は中和の氣候であつて、住民生活の上よりして比較的健康地と稱さなければならぬ、北滿洲なる哈爾濱は、滿洲中でも極寒の地方に屬するが、比較的高度の温熱を要する茄子、胡瓜、南瓜、西瓜等も夏季には十分に成熟し、牽牛花の如きも屋外に於て無難に開花することが出來る、烏拉地俄斯德（ウラヂオストク）遐りは緯度から言へば遙に南方に位するが、牽牛花の屋外に於て開花するとは甚だ至難である、是れ其原因たる氣候に冷熱の差異

の太だしきと、海霧の影響を受くることが多いとの爲めである、哈爾濱は此點に於ては十分良好なる氣候地と稱することを得べく、西瓜の如きは西洋種の良種が盛に栽培せられて風味殊に佳良を以て稱せられて居る。併し滿洲は定期風の勢力を受くるが爲めに、夏には一般に多雨にして、毎年七八月の交には、全滿洲を通じて、一齊に霖雨と爲り、河流漲溢、爲に全く交通を阻止することがある、左れども夏季中降雨の不足よりして、旱魃の打ち續ける地方も全く無いではない、即ちヂアン・グア・ツァイ及び帶馬溝南山脈の間なる寧古塔地方の如きである、而して晩春及び初秋の候に於ては松花江南岸の地及び琿春附近には、矢張霧が多いのである。

◎住民と其稠度

（稀薄よりも寧ろ無人の境に幾し）

滿洲の人口は約一千五百萬人であるが、其中盛京省に七百萬人、吉林省に六百萬人、黑龍江省に二百萬人位の割合である、滿洲には未だ政治の行き屆

かざる爲め、自然戸口の調査を缺くので、其實數は勿論之を知ることが出來ないが、從來幾多旅行者著述家の舉示せる中にて、一千五百萬人は最も中間數に近い計數であれば、先づ最も信を措くに足るべきものとして善い、而して是等住民の殖民せる地方は、如何なる地に最も稠密なりやといへば、松花江中流の沿岸地方即ち伯都訥より露國の新都市たる哈爾濱を連ねて三姓に至る一帶の地と、吉林より奉天遼陽を經て牛莊及遼東半島に通ずる國道沿線とにして、殊に後者は滿洲中最稠密の地と稱せらるゝ、最も人口の稀薄なる地方は興安嶺の支配する黑龍江省の西北部及び總じて露領に接したる地域は、住民最も稀薄にして、數百里を連ねて殆ど生民無しといふも不可無き位で、唯だ沼地及び森林の間に、土着民に適當せる農業地あつて多少の住民を見るのみである、兎に角滿洲三省を通じて、一平方英里に五十三四人の割合であるから、人口稠密なると我邦の如きより見れば、稀薄といふよりも寧ろ無人の境

に幾しといふの、却て適當して居るのである。

◎滿洲の種族

（亞細亞人種の天然的標本室）

滿洲の住民を組成する種族は頗る雜多である、其最も多きは支那人即ち漢人、其次がトゥングース人、又其次が滿洲人である、滿洲と云へば其固有の土着人民たる滿洲人が多からざる可らざる筈であるが、實際は數の上に於て何等の地位をも占めて居ないのである。黑龍江の流域に屬する地方は、古來文化の發生を見たる事無ければ、隨ひて今日も尙草昧の狀態には在るが、住民は遠き以前よりして棲息し、且つ其種類も極めて雜多で、亞細亞人種の變形を陳列したる天然の一大博物館とも稱するとが出來る。左れば黑龍江の水域に屬する北滿洲の地に於ても、大同小異の未開種族が、各〻其風俗習慣等、生活の有らゆる狀態を異にして、或は漁業を爲し、或は獵業を爲し、或は牧畜を爲して、處々に散點棲息して居るのである。今左に其名稱のみを擧ぐるも、

前に示したるトゥングース種族を初めとして、ダウール種族、ビラール種族、ヲロチョン種族、マニェーグル種族、ゴーリド種族、ソローン種族、エルレット種族、ブリャート種族といふ具合に澤山ある。而して近時露國の勢力の日に益〻固定せると共に、滿洲領有の情形全く成れるのみならず、露人は財力と兵力とを以て樞要に占據し、日本人朝鮮人なんかいふのが、亦驥尾に附して續々遺つて來る、滿洲は事實の上に於て世界各國、少くとも東洋人種の共同殖民地たるが如き觀がある。

◎滿人と漢人

（滿洲は事實上漢人に壓せらる）

滿洲は政治上に於ては無論滿洲人の支配下に屬して居るが、事實上に於ては漢人に壓せられて居るのである、滿洲固有の土着民たる滿洲人は總數七十萬の上に出でぬであらう、之を滿洲の全人口一千五百萬に比すれば、僅に二十分の一にしか當らないのである、而して支那人即ち漢人はといへば、實に十

中の七八を占むるのである。支那人の最も濃密に住居するは盛京省であるが、毎年本部支那より移住する者陸續絶にざるが爲め、支那人は益〻増加する許りで、滿洲人との懸隔が益〻甚しく爲つて來る、而して是等來住の支那人は殆ど皆山東直隷及び山西の三省よりする者で、就中山東省よりの移住民最も多く、彼等は重もに土着して農業に從事し、其言語風俗全く滿洲的と爲つて居る、山西省よりの移住民は主として行商を業とし、巧みに土語を操るに長じ、滿洲の商權は殆ど彼等の手中に存して居るのである。滿洲人の住居する區域は、主として松花江の右岸と牡丹江（ムダンジヤン）の潤す水域とであつて、總べて八旗兵中に編入されて居る、而して彼等には又新舊の二種族があつて、其舊種族といふのは、昔て現朝の祖先と幾多の戰場に出入したるものであるが、滿帝の北京に入るに及び、殘りて滿洲に留居せる者の子孫である、新種族といふのは舊種族の著しく減少せる爲め、其補缺として八旗兵に編入された

者であるが、滿洲種族の體格上の特徴は、身幹餘り高長ならずして、皮膚稍〻暗色を帶び、頰骨秀で額廣く、稍〻斜に決裂せる栗色の巨眼を有するといふ相貌であるが、併し現時の滿洲種族は、移住支那人と混合して、漸次其特色を失し、殊に其兒童の如き、支那人の學校に於て純然たる漢人の教育を受くるが爲めに、相貌骨格は勿論、風俗習慣及び思想迄、全然混淆して今は此兩者を區別するに於て頗る容易で無いのである。

◎滿洲の地味

（大部はレツスと稱する輕鬆の土壤）

滿洲の地味に關しては、未だ十分なる調査の遂げられざる爲め、其肥瘠に就きては、明確の斷案を下だす事は出來ないが、一般に肥沃を以て稱するとが出來る、否寧ろ其或部分に至つては世界に卓絶せる地味を有して居ると言つてもよい。今滿洲の地味に就きて露國の著書中に散見せる所を摘記すれば、概ね次の如くである。滿洲の大部分はレツスと稱する鬆脆の土壤を以て蔽は

れてあつて、鳶色の土成分多き疎鬆の塊を成し、乾燥せるものは容易に之を粉末にすることが出來る、而して其レッスの疎鬆性なるは畢竟曠原的草葉の腐朽して成れるが爲めであつて、其常に濕潤して居るのも全く此故である。レッスの成分中には石灰質の粘土より成る細分子と、雲母の細片を混せる石英の粉末とを含有し、又泥灰石及び地上の軟骨動物の殼即ち螺の如きを混じて居る、其府の厚さは固より一樣では無いが、普通には極めて薄き府を成して

展擴して居るけれども、或場所に因りては實に一千呎以上に達する所もある元來斯く疎鬆の土壤であるので、之を鋤犁する爲めには、唯だ鶴嘴鋤及び鍬を用ゐるのみで、左迄勞力を要し無いのみならず、地味が十分膏沃である爲めに、肥料を用ゐずして十分豐況なる收穫を見ることが出來るといふ重寶なる土地である、併し北滿洲に於ては沙地及び粘土質の土地も少くないので、即ち海拉爾(ハイラル)より東方に亘れる地方は一般に粘土及び細石より成り、亦甚しく鹽

分を含有し、松花江の溪谷の或處に於ては過度に粘土を混合し、又寧古塔地方に於ては土沙相半して耕作上鮮からざる注意と勞力とを要するが如き所もある、而して遼東半島の全く礫磈たる岩石より成りて、土地最も磽确なる事は邦人の夙に熟知する所である。

◎山林

（必ずしも無に非ず、往々處女的山林を見る）

滿洲の山林に就きては從來我旅行者の目擊せる所では、殆ど皆無と言つても

よい、併し是れは單に鐵道に由つて旅行し、視線の及ぶ範圍内の話で、實際は必ずしも絶無といふ事でも無い、今其最も豐富なる地域を擧ぐれば、クマール河口より松花江に至る黑龍江畔の地、アルグニ(メルグニ)河より墨爾根(ハイクン)に至る間、及びツルハイトゥイより愛琿(アイグン)に至る間には鬱蒼たる落葉樹及び常綠樹の混合林がある、滿洲に於ては長白山系に屬する高地及びチアン●ガウニ●ツァイ●リン山脈最も深林に富み、吉林に聚る河舟の多くは、一に材木積取りの爲め

であると言へば、其樹木に富んで居る事は優に證據立てることが出來る。南北兩滿洲の間に氣候上の著しき差異を有する結果として、其樹木も亦之が勢力を受けて、幾許か相異なれる特徴を現はさ無ければならぬ筈であるが、不幸にして嚴格に之を表示するとの出來ないのは予輩の大に遺憾とする所である。併し今單に滿洲特種の植物として之を擧ぐれば、胡桃樹（アレーシニク）を推さ無ければならぬ、アレーシニクの樹林中には必ず杉樹（イエリ）、松樹、楓樹を混じて、單獨に深林を成して居ることは無いが、之が先づ滿洲特有の樹木であらう、最も普通に分布せる植物は、菩提樹（リーパ）、ヤーセニ（桦（トポリコ）の一種）、白楊（トーポリ）、樫（ドウブ）、白樺、黑樺、楡樹（ヴヤーズ）、赤楊（オーリハ）、銀松、落葉松、リヤビーナ（和名未詳）、チェリョームハ（エゾウハミヅザクラ）、鼠李（クルーシナ）（クロツバラ）等であつて、要するに滿洲の氣候の常に濕潤せる原因よりして、其植物は多孔的で、建築材としては稍〻脆弱であるが、他の支那内地の森林と同じく、千古未だ曾て斧斤の入らざる鬱蒼の深林

が到處に存して居る。

◎農産物

（五穀蔬菜物として生ぜざる莫し）

農業植物として最も著しきは豆類及び稷類に屬する穀物である、豆類中でも大豆は最も饒多にして滿洲の一大富源を爲して居る事は世人の知る所である、又稷類中の一種たるカオリャン即ち高黍は、滿洲住民唯一の食料として、到る處に耕作せられ、而して其樹木大の莖は、或は屋根を葺き、或は燃料に用ゐる等、其用途實に廣大にして、滿洲住民の生命は一に繫つてカオリャンに在りと言つてもよい。其他の農業植物としては、我邦に產する穀類蔬菜は大抵產せずといふと無く、小麥あり、大麥あり、燕麥あり、蕎麥あり、玉蜀麥あり、麻類あり、煙草あり、鴉片を製する罌粟子も出來れば、葱、蒜、胡椒、馬鈴薯、白菜等もあり、人參の如きすらも發生するといふ事である、唯だ米のみ氣候の著しく寒冷なるが爲めに耕作するとの出來ない許りが遺ふ所であらう、果樹に至つて

は、本來農藝の進歩せざる滿洲に於て、之を見るとの出來ないのは當然である。要するに滿洲の地味は概して膏腴である、而して其氣候も嚴烈ではあるが農業上何等の故障を見ることが無いのであるから、若し農作上の改善を行つて、盛に泰西の農法に則つて耕作する事としたでもあらうならば、滿洲の將來は世界の一大農業地として、大に矚望に値するのである。何んでも早く日本が滿洲を自己の勢力圏内に收むるのが今日の急務である。

◎野獸と禽鳥

（滿洲は好個の遊獵地）

滿洲の獸類中其猛獸に屬すべきものには、虎も居り、豹も居り、山犬も居るが、是等は無論稀れに遭遇する所である、最も多きは野猪で、狐、狼、熊なども決して鮮くは無い。獵獸に屬すべき者には黑貂、栗鼠、兎、野猫、水獺等であるが、就中黑貂は額木索（オモソ）より渾春への山中に棲息し、栗鼠はノミニ河域に多い。反獵動物には鹿族が居て到處群を成し、其毛皮は裘衣と爲して最

も温暖である、無角の鹿は南部地方に多く棲息して居るといふ事である。禽鳥に至りては其種類が頗る多くある、露國の或博物學者の說に依れば、滿洲は禽論學上露領黑龍州と同一地域を爲して、猛鳥に屬する者、四十種以上に及び、雀屬に屬する者、約二百種にも近いといふ事である、今雀屬中で最も多きものを擧ぐれば、魚狗（ジモロドク）（和名カハセミ）、戴勝（ウドードウ）（和名ヤツガシラ）、ペーソチカ（和名未詳）、チェカン（和名未詳）、雲雀（ジアヴオロノク）、鶺鴒（トヴリヤツグースカシニーフア）、白鷺鳥（和名シジウカラ）、燕、蓊雀（バダローシニク）（和名アヨジ）、ヴイローク（和名未詳）、烏、喜鵲（ソロカ）（和名カサヽギ）等である、而して鷄屬に屬する者には雉子、鳩、鵠（クロバートウカ）、樹鷄（リヤーブチク）が居る、沼鳥にはクリーク、ベカースなど稱する鷸（シギ）の一種が居る、又雁、鴨はノンニー河畔に最も多く翔集し、又長脛鳥即ち涉水鳥は之を水上に游弋する者に比すれば、其數決して之に下らずして、此等の中には鶴や白色及灰色の鷺も決して少くないのである、而して水鷄は到る處に遭遇することが出來るとい

ふ話である、來年あたりは必ず日本人が滿洲でズン〳〵遊獵でも出來るとに爲るかと思へば快心の至りに堪へ無いのである。

◎滿洲の觀光

（孤劍飄然烏拉地俄斯德を發す）

予が旅行は昨卅六年の九月十一日といふに突然思ひ立つて孤劍飄然烏拉地俄斯德を出發したのである、時は尙殘暑の候ともいふべきであるが、北地の事とて金風既に蕭颯として、暑からず寒からず、旅行には最好適の季節である。蜿蜒として長蛇の如き汽車が、ラヴィヨフ・アムールスキイ半島の西岸を縱ひつ〳〵、一曲一折して行く、山光水色、兩つながら趣を得て、景致最も淸秀、恰も畫中を行くが如しともいふべきである。半島を過ぎて既に太陸の境に入れば、往復幾たびするも依然として茫漠の原野であるが、野菊、萩、桔梗、薄など今を盛りと咲き亂れて、天然の優美は其荒凉、殺伐、凄愴の中にも、容易に看取することが出來るのである。烏拉地俄斯德は午前の十一時頃、

に出發して、尼古里斯克（ニコーリスク）へ着いたのが、午後の四時頃であつたが、一先づ下車したる上、再び七時何分といふ汽車に乘じて滿洲地へと向ふたのである、東淸鐵道への乘換驛として有名なるグロデコヴォへは、夜の十時過に着いたが、夜中の事でもあるし、隨分混雜したが、今日と爲つては烏拉地俄斯德より滿洲に行くにも、滿洲より烏拉地俄斯德へ來るにも、別段乘換を要せず無く爲つたのは、滿洲の旅行上鮮からざる便益と謂はなければならぬ、併し戰爭の開始せられたる今日、斯る詮索は何等の價値をも有せず無く爲つたのである。

◎露滿境上の關門

（露國の進取的外交と我退守的外交）

面倒なるグロデコヴォ驛の乘換も辛うじて了へ、滊車進行を初むれば、次なる驛は露淸國境の關門として、夙に我邦人の記憶に存せる有名のバグラニチナヤ驛である。此驛は露國の土工今も尙熾にして兵營の建築も多く、邦人の在留する者百名餘も居るとぞ。

あるが、實は夜中であつた爲めに、何時の間に通り過ぎたか記憶にさへ存して居らぬのである、露領より國境外へ出づる汽車であるので、別に手廻はりの檢査も受け無かつたが、滿洲より露領へ入らんとするには、是非とも此處で稅關の檢査を受け無ければならぬのである、パグラニーチナヤとは露語にて國境といふを意味し、露清の境上に在らねばならぬ筈であるが、實際は國境には無くて、五露里も深く滿洲の方へ喰ひ込んで居るのである、勿論滿洲と露領烏蘇里との間には、一帶の山脈が横はつて居て、其絶頂に停車場を置く譯にも行かぬ無いので一寸滿洲の方へ失敬した譯でもあらうが、是が露國外侵政略の最も特色なる所であつて、若し我邦ならば無論遠慮して五露里も手前に置くべき譯であらう。併し猿も木から落つるといふ諺に漏れず、今度といふ今度は如何なる露國の進取的外交も、頭倒大怪我をしなければならぬといふに至つたのは、氣味の好い話である。

◎馬橋子

（予が眼に映じたる滿洲の第一驛）

客夢搖々、小綏芬（スヤオスウイフン）、細鱗河（セーリンヘー）、太平嶺（タイピンリン）の諸驛を過ぎて、漸く目を醒せるは馬橋河（ツイオヘー）驛である、蟋がて朝の七時頃でもあらうか、固より微々たる一小驛であつて、別段記述に値すべき所では無いが、滿洲の疆域に入り始めて予輩の眼底に映じたるは此驛である、昨は露領今は滿洲、見る所の光景は全然異らざるを得ないのであるが、其驛は悉皆露國式に出來て居て、露西亞人がゴロゴロ遣つて居る所なぞは、烏蘇里途上に見る所と毫も異らないのである。馬橋河を出づれば、曉霧尙模糊として眼界の盡くる所を極むることが出來ないが、其平野は可なりに廣き地積を占め、丈餘に生ひ伸びたる黍畠の間に、粗雜なる滿洲人の家屋が、見るも哀れに悄然として點在して居るのである、其處を露國が遠慮會釋も無く、鐵道といふ恐ろしき武器を以つて縱斷的勢力を恣にして居るのであるといへば、北滿洲の狀況は略ゝ言ひ盡くすことが出來るであ

らう。

◎磨刀石と牡丹江

（兵略上に於ける其地位）

穆林に至れば前驛よりも稍〻繁盛であつて、小驛に似ず煉瓦家屋の多きは、何うしても鐵道守備隊の兵舍と見なければならぬ。帶馬溝を經、磨刀石に至りし頃は蕪がて十時頃でもあつただらう、露國の經營は依然として盛んなもので、家屋の建築が續々起つて居る道路の傳ふる所に依れば、露國はバグラニーチナヤ驛より哈爾濱に至る間の駐兵を、悉く此磨刀石へ集合せんとの計畫を有して居るので、斯くは建築が盛んなのであるといふが、果して然るや否やは固より保證の限りで無い。併し我兵にして若しバシエット灣に上陸し、直に琿春を陷れ更に長驅して寧古塔を衝くが如きことでもあれば、東露地方と露本國との連絡を絶つべきは此磨刀石に非ずは、必ず海林であらねばならぬことを記臆して置かねばならぬ。牡丹江驛といふは磨刀石の次の驛であるが、丁度牡丹江といふ同名の河上に建

てられたる一市街である、兵略上の地位より言へば、素人目には磨刀石よりも寧ろ要害の地を占めて居るらしく見ゆる、從つて露國の兵備も頗る嚴重で、駐兵も一個大隊は慥に居る、其河に沿へる小高き地に煉瓦家屋の建ち並べるは言ふ迄も無く其兵營である。

◎牡丹江の流域

（殖民地としての條件は露領よりも好況）

牡丹江一名ホツルハ河は松花江の一支流であつて、其延長も四百餘里内外に過ぎ無い、加ふるに急流にして且つ處々に淺瀬が多いので、扁底の船か、若しくば筏で無くば上下するとが出來無いが、兎にかく東北滿洲に於ける巨流の一に數へられ、其潤す流域には可なりに廣き平野があつて、寧古塔及び三姓の如き巨邑を初めとして、大小幾百の村落點々散在し人口も決して鮮くない、農業は見渡す所にては相應に開けて居るやうだし、地味も惡るいといふとは無い、唯だ夏時旱魃の虞れが往々あるのと、近時鐵道が開通して露國の

經營が日に歩を進むると共に、停車場附近の住民は着實なる農業よりも、運搬及各種の土工に從事して勞役に服する者が多いらしく見ゐる。要するに露領でも烏蘇里地方殊に尼古利斯克附近は土地豐饒にして、東部西比利の一大農業地を以て稱せらるゝ位であれば、殖民には不都合無いとは勿論であるが、僅に一山を隔てゝ、滿洲地に入れば、地味は更に膏腴である、此牡丹江の潤す流域の如き、地積は左迄廣大とも見られ無いが、殖民地としては烏蘇里地方よりも更により多くの好況なる條件を具へて居るのである、露國が東洋に於て常に望蜀の念の絶ゑ無いのは畢竟此故である。

◎寧古塔と其街路

（寧古塔街道は盜賊の巢窟）

寧古塔は吉林省北部に於ける重要なる行政廳の所在地であつて、南は琿春西は吉林北は三姓に通ずる大道路を有し、此地方に於ける政治的中心を爲すと共に、亦幾分か商業的中心たる事實をも有して居る、住民は近時支那人の

移住に由り急速に增加し、今は人口三四萬を有する一都會を成して居る。東清鐵道東部線よりして寧古塔へ入るには、磨刀石よりも牡丹江よりも出來るに相違無いが、普通には海林よりするのが最捷路である、道程は露西亞里數で二十六七里か三十里位であるといふから、日本の里數にしたら七里內外のものである、併し途中には峠が幾個もあつて盜賊出沒するので、來往頗る危險であるといふことである、露西亞人なんかも獨りで通行が出來ないから、必ず峠の下で日本人を待ち合せて行くげな、さういふ弱蟲が戰爭をしやうといふのだから面白い。

◎横道河子の經營

（山中の歐羅巴式都邑）

横道河子（ハンタヘーヂ）はバグラニーチナヤ驛と哈爾濱との丁度中間に位して、東部線中露國が最も力を用ゐて其經營を盛んにして居る所であつて、今現に宏大なる停車場の新築中である、他の各種の土工も到處に起され、支那人露西亞人等勞働者の入り來る者紛然として雜踏を極

めて居る、此驛は山中の一驛であれば、市街高低曲折して極めて不規律であるが、其建築中の家屋は何れも煉瓦造りか石造のみであるが故に、其經營の完成せらるゝ曉には、巍然たる洋風の市街を寂莫たる山中に現出するであらう、目下露人の此地に在留するは一千六七百人で、支那人は約三千人、日本人は嘗て百數十名も在留して居たともあつたが、鐵道工事の漸次緒に就くと共に、次第に他に散去して、今は七八十名しか居ない、其從事せる職業の重もなるものは、大工石工等の諸職人で、又ラムネ製造、理髮、寫眞、洗濯、貸席を業とする者もある、目下工事中なる建築物の主なるものは、鐵道會社の社宅寧ろ官舍であつて、兵舍之に次ぎ、約三百人の哥薩克兵が駐屯して居るといふことである。ハンタヘーザに就き今も在留邦民の間に一談柄として殘つて居るのは、其地名が日本人の名前にもありそうな所からして、天草嶋原邊りから行く郵便に、滿洲ハンタヘーザ樣方何の誰殿といふやうな表

書のゝが往々あるといふ滑稽の話である。

◎東北滿洲の山林

（橫道河子以西爵林若者）

露滿の國境なるバグラニーチナヤ附近の樹木に富んで居るや否やは、夜中の爲め之を目擊することが出來なかつたが、曉方よりして見る所は烏蘇里地方よりも樹木が疎らであるやうに感じた併し橫道河子附近に來るといふと、其山は肉落ち骨出づる底の岩山ではあるが、樹木は次第に繁茂し來りて、鬱然として蒼翠滴らんとするが如き深林がある。其樹種は滿洲特有の樹木と稱せらるゝアレーシニク即ち胡桃樹の一種と、白樺黑樺及び圓葉柳とが最も多くを占め、又通俗バレーハと稱ふる朝鮮槻の如きものもある、此圓葉柳は我邦にも產して燐寸の原料と爲るものであるが、橫道河子より以西に懸けては、此樹が殊に多いので、嘗て邦人中燐寸の製造を哈爾濱に起さんとさへ目論んだ者もあつたが、遂に其事無くして止んだのは甚だ遺憾の至りである、併し

我邦にして次第に滿洲に勢力を得ることも爲らば、斯る事業は當然邦人の手に依つて經營せらるゝことと爲るであらう。

◎東洋の小米國

（穀類産出地としての滿洲）

條林子（ガオリンズウイ）に至れば目が全く暮れて了まつて、是れより石頭河子（シトウーズウイ）、赤肅河（ウエイスーハ）、一面坡（イメンポ）、烏吉密（ウヂミー）、茂山（マオシアニ）、小林（スキオリン）、阿勒士江子（アルチヤンズウイ）の諸驛を全く暗中に過ぎて、漸く目を醒ましたのは翌十三日の午前六時半頃であつて、恰も松花江岸の沃野たる阿什河（アシヘ）附近であつた。滿洲は東洋の小米國と稱せらるゝ丈けに、たとへ其一部には沙地や岩石の地があつて耕作に適せずとはいへ、其大部分に至りては到處農業牧畜に適せざるは莫く、殊に松花江の潤す流域即ち阿什阿及び哈爾濱地方よりして遼河の水域に及ぶ地積は、土地最も廣大、地味最も豊沃にして、滿洲の一大富源たる大豆は實に此地方に産するのである、現今は住民も未だ多からず、耕作法も十分發達して居ないので、其生産力も從つて頂點に

は達して居ないが、若し人口愈〻稠密と爲り、農法に改善を加へて、高黍の如き賤價の穀類に代ふるに高價の穀類を以てするでもあらうならば、穀類産出地としての滿洲は將來最も有望なるものであらう。露國が從來滿洲に對して野心勃々たりしは、太平洋に出づる門戸を求むるに在りしとは勿論であるが、又一は滿洲の穀倉たる天與の富に眼を着けて居たとも、亦全然與らずと謂ふことは無い、我日本は磽确なる遼東半嶋のみを見て値踏をしたので、折角碧血を流して贏ち得たる土地をも抛棄することと爲つたが、露國は背後よりして夙に滿洲の富を測定して居た爲めに、人の物を横奪して迄自分の物にしやうと迄野心の執拗なる所以である。

◎哈爾濱の一旬

（海拉爾の戒嚴圖らず哈爾濱の滯留と爲る）

哈爾濱へは同じき朝の七時半頃に着いたのである、通常哈爾濱へ下車するには新市街（ノーヴイゴーロドウ）であるが、自分は誤つて舊市街（スタールイ）哈爾濱（ハルビン）へ下車したので、更に馬車を賃

して舊哈爾濱から態〻埠頭區(ブリースタニ、スンガーリ)迄行くといふやうな迂濶を遣つたのである。埠頭區には我在留民の總代役場たる松花會といふがあつて、本願寺の出張所も此内に設けられてある、開敎使の谷口氏は予が舊知でもあるし、又松花會事務所の諸氏も皆舊識であるので、ツイ事務所に厄介に爲るととなつた、初めは哈爾濱に二三日滯留の上は更に西して海拉爾(ハイラル)へ迄出掛くる積りであつたが、哈爾濱での噂に依れば、海拉爾に於ける露國の警戒極めて嚴密なる爲め、日本人の旅行は中々面倒であるといふので、強ゐて左る由無き事に携はる必要もなければ海拉爾に行くべき時間を以て哈爾濱地方の觀察に費したる方がより利益であるといふ勸告で、料らずも哈爾濱には淹留十日に及んだのである。

◎邦民の自治團體

（松花會事務所は其一例也）

露領亞細亞及び滿洲地方に於て、日本人の稍〻大なる聚團を爲せる處には必ず倶樂部若しくば事務所と稱する自

治的の惣代役場があつて、在留邦民相互の幸福と利益とを增進する所以の機關と爲つて居る、松花會事務所といふのも、全く此目的に由つて設立せられたるものであるが、此外奉天にも旅順にも青泥窪にも皆各〻此機關が備つて居る、併し露領の方では全然露國の專制治下に立た無ければならぬので、苟も毫末の政治的臭味を帶ぶるが如き事あれば、決して其團結若しくば會合の存立が認められ無いのであるから、烏拉地俄斯德や、尼古里斯克やハバロフスクや、ニコライフスクや、ブラゴヴエシチェンスクなどに、皆其れ〳〵日本人の自治團體があるが、明かに其目的を標榜して立つことが出來ないので、或は慈善、或は衛生、或は敎育といふやうな事の爲めに設立されてあるかの如くに粧ひて、其實は不完全なる町村役場若しくば事務館と在留人民との間に立つ畸形的行政官廳たる事務を執つて居るのである、此點に於ては滿洲に於ける各日本人事務所は非常に寛大に取扱はれて、公然會の存立が露國より認

められて居るのみならず、惣代選擧の際には露國の官吏が立合つて吳れたり、規則の草定若しくは改正には、露國官廳が認可を與へて吳れたりする事に爲つて居る、是れは斯る自治的團體の存立は、翌に在留邦人の幸福と利益とであるのみならず、露國側よりしても日本人の取締上利便を得ることが決して尠くないので、滿洲が露國の領土で無きを幸ひ、斯る便宜の處置も執れ得るのである、併し一面よりして嚴格の見解を下せば、露國が滿洲に於て外國人たる我日本人に對し認可權を有するといふ事は、不埒千萬の次第であつて、苟も露國が滿洲の主權者であらざる以上、斯る權能を有せざる事は昭乎として明なる譯である。

◎蜃氣樓的市府

（哈爾濱は露國東亞經略上の一大產物也）

哈爾濱は松花江の右岸に位し、北滿洲の最も膏沃なる平野に建てられたる露國の新市街であつて、東清鐵道の中央大停車場たる地位を占むるものであ

る、故に其經營たる殊に宏壯盛大にして、迚も旅順や靑泥窪の比で無い、自分は哈爾濱の規模を以て旅順と靑泥窪とを合せた位の大さと見て來たが、決して誇張の言で無い、而して此人爲的に創設せられたる露國の新市街歐洲式の模型に據て造營せられたる大都府は、實に三個の隔離せる市區より成つて居るのであるが、近時工事の日に進捗すると共に、市街の區劃も整然し家屋も立ち並びて、今は漸次相接續せんとする位に爲つて居る、數年前迄は唯だ松花江岸なる空漠の原野に炊烟絲の如くに立ち登れる荒涼の寒村であつたが、それが一朝變じて富盛の都市と爲れるかに想ひ當らば、其變遷の速あるを桑田碧海の嘆も實ならざるのである。憶ふに此蜃氣樓的市府たる哈爾濱市は、露國が東亞經略上の一大產物とも稱すべくして、愛親覺羅氏が遼河の水域に建てられたる奉天府に據つて北清一帶の地に號令したる如く、露國は實に松花江の流域に展擴せる平原に據つて東北亞細亞の一圓を制せんとする雄

大の企圖であつたのである、併し露國が撤兵問題に依り、頑強にも公約を履行せざるのみか、水陸兩棲動物たるアレクセーエフを極東大守とし、旅順に出張つて以て、平生の慣手段たる恫喝により、列邦を威嚇し得べしと信じたのは、疑も無く露國の一大失策であつて、外侵政畧の强行に急なるよりの大怪我である、露國の爲めに計れば矢張り哈爾濱の形勝に據つて徐ろに力を養つた方が萬全の策であつたのである、而して哈爾濱は亦實に天然と人爲と二ながら、此目的に向つて最も適當して居るのである。

◎舊哈爾濱

（哈爾濱經營の基根地）

哈爾濱は三個の相隔離せる市區から成立つて居ると言つたが、其市區といふのは、第一がスタールイ●ハルビン、第二がノーヴイ●ゴーロド、第三がプリースタニ●スンガーリである。スタールイ●ハルビン即ち舊哈爾濱は最南方に位し、露國が哈爾濱經營の基根地とも稱すべくして、目下家屋も畧〻建築し

丁り、稍〻整頓せる市街の體裁を成して居る、此地は主として東清鐵道會社員の社宅及び露國文武官吏の官舍が多くを占めて、技師町役人町ともいふべきである、現に東清鐵道會社技師長の社宅及び滿洲守備隊長の官舍もある、兵營も約三十棟位あつて二千人を收容する事が出來る。斯の如くスタールイ●ハルビン即ち舊哈爾濱は、露國が始めて此大市街の經營に着手せる基根地であつたが爲めに、夙に露清銀行の如きも此地に建築せられ、アーリベルス商會チッリン商會等の大商館も亦此地に開業し、一時哈爾濱の繁華は此地を中心として居た樣な傾があつたが、今は工事の着々歩を進むると共に、其中心も自然に他に移動するとと爲つたので、見狀は寧ろ寂寥の狀態に在りと謂はなければならぬ、舊哈爾濱には露西亞人が最も多く、技師町役人町の稱あると共に、露西亞人町の形を有して居るのである。

◎新市街

（新市街を見ず、露國經營の盛語るに足らず）

ノーヴイ●ゴーロド即ち新市街は中部に位し、規模最も宏大にして東清鐵道の中央大停車場たる哈爾濱停車場も此地に設けられ、鐵道本局及び總支配長ホルワート氏の社宅、郵便電信本局、裁判所、病院、寺院等も亦此地に置かれ、露清銀行の如きも既に宏大なる家屋の建築に着手し、落成を俟ちて不日引移らんとし、又兵營は停車場に隣れる稍〻小高き丘上に鱗次して建ち並び約五千人を收容することが出來るであらう。要するに此地は官衙及び兵營の所在地にして、其工事の悉く落成するに至らば、偉觀必ず人目を奪ふことであらうが、今は唯だ市區の區劃が始めて成れる許りで、漸く家屋の建築に着手せる迄である、併し其規模の宏大なる事は、過ぐる者をして殆ど驚倒せしむる位である、日光を見されば結構語るなとは、邦人の諺であるが、露國の東亞に於ける經營の大を言はんと欲せば、先づ哈爾濱の施設を見ざるべからずと

言ひたき位である、新市街の商業地としては、寺院より東方の地を區劃して一般商人の營業を許すべき筈で、チゥリン商會の如きは既に新建築を起しつゝあるのである、日本人の在留者は舊哈爾濱にも、亦新市街にも極めて僅少である。

◎埠頭區

（商工業地としての哈爾濱）

プリースタニ●スンガーリ即ち松花江埠頭區は最北に位し、松花江の汽船發着場にして、亦松花江停車場の所在地である、水陸運輸の利最も便なるが爲め、商業地製造地として夙に繁榮し、支那人露西亞人の商店は勿論、日本人の商店も、其大部分は此地に存在し、在留日本人の事務所たる松花會の如きも、亦此地に設けられてある。此市區の在住者は支那人殆ど其七八分を占め、殊に松花江よりする荷物の揚卸や、建築材料の運搬や、勞働者の雜踏や、支那人の露店で、市街熱鬧を極むるのみならず、家屋亦陋矮にして道路の不潔言はん方無く、馬蹄一たび沙塵

を揚ぐれば、滿街黄雲の裡に葬り去らるゝのである、併し近時其商工業の益〻發達するに伴ひ、煉瓦家屋の建築を起す者日一日より多く、到處大厦高樓の煥然人目を惹く者が漸次多きを加へたのである。埠頭區の下流に連りて傅家屯（ホウヂヤトン）といふのがある、松花江の河畔に沿ふて行けば五六町程であるが、埠頭區とは全く別であつて純然たる支那人の市街である、人口約二萬、商業最も殷盛にして、路上常に市を爲し、哈爾濱の發達に關しては最も密接の關係を有して居るのである。

◎商況一斑

（殆ど世界の不景氣を知らず）

人の聚まる處即ち財の聚まる處なる語は、之を最も哈市の現狀に觀て證することが出來る、露國が殆ど强力を以て此空漠たる滿洲の曠野に人衆を招徠して以來、哈爾濱なる人爲的の市街は、是等地方農產物及び各種貨物の集散地と爲り、其商業は近時東露地方の萎靡振はずして、大小商賈の一人として不

景氣を嘆せざる無きに反し、獨り哈爾濱のみは殆ど世界の不景氣の何たるを知らざるかの如くなるは實に異數と謂は無ければならぬ。憶ふに哈爾濱の商業が斯くの如く盛況なるは、其原因たる一に經營の今正に全速力を以て行はれつゝあるが爲めで、畢竟露國が金錢を投下する結果であれば、工事の完成と共に斯る狀況の永遠に持續すべしとは決して考定するとは出來無いが、兎に角現在に於ては最も好況なる情態に在るものと謂はなければならぬ。而して今是等の商業中に就き、何れの國人が最も勢力を占むるやと言へば、大商店に在りては無論露國人及び歸化露國人であつて、中流の商店に在つては東露地方と同じく依然支那商人の掌中に在りと謂ふべく、獨太人韃靼人及び日本人の商業亦た稍〻觀るべきものがある、而して其顯ぐ所の商品は、露人及び獨太人韃靼人に在りては主として歐露貨物を販賣し支那人は歐露商品に雜〻るに東洋的諸雜貨を以てし日本人は專ら自國製品を販賣して居るのである。

◎邦人の商業

（亦比較的好狀態に在り）

一般商業の好景氣なるに連れて、我日本人の商業も多少活氣を帶ぶる事であるが、元來薄資の商業であるので、露人の大商店と拮抗して哈市の商權を左右し得ざるは遺憾の至りである。哈爾濱に於ける邦人の商店は、其商店と名稱を附し得べきものは約十五戸あるが、其稍〻見るべきものは、協信洋行、森富商會、日滿洋行、大和商會、德永商店であつて、就中協信洋行森富商會を推して巨擘とすべく、而して是等は齊しく本邦製の雜貨を商つて居るのであるが、其中でも互に多少專門的傾向を有して、幾許か本邦商人相互の競爭を避くる事實あるは喜ぶべき現象である、即ち協信洋行の絹布類に於ける、森富商會の和洋酒罐詰類に於ける、日滿商會の露人向出來合洋服に於ける、大和商會の日本製家具類に於ける、德永商店の邦人向諸雜貨に於ける、皆其一例である、要するに東露地方に於ては製造品殊に裝飾品贅澤品は重稅を課せら

るゝので、邦人の店頭は極めて寂寥の感があるが、足一たび露領を離れて滿洲に入れば、邦人の商店は小規模樣ながらも、絹布、絲織物、極彩色陶器、各種玩弄品等を場所狹き迄に陳列して、燦然人目を惹くのは、露領に於ける日本商店と大に趣を異にして居る所である。哈爾濱は新興の市府である爲めに、日本商店も皆新來の應舖であつて、是等の多くは嘗て露領に於て一たび根據を据ゑて營業に從事して居たものであるが、露國の政治的軍事的經濟的勢力の、漸次滿洲に向ひて移動せると共に、日本商店も亦其勢力に追隨して、哈爾濱に引越して來たもので、若し商業に斯る名稱を附し得べくば、遊牧的商業とでも稱すべきである、唯だ協信洋行のみは日本から新に資本を携へ來りて營業を開始したものであるといふ事である。

◎我商品の勢力

（或物は露國品を壓倒せり）

北滿洲の經濟的中心たる哈爾濱に於け

る本邦商業の地位の尙微々たる今日、我商品の北滿洲に蔓延し普及せん事は、到底期し得べからざる所であるが、併し或種類の商業に至つては、必ずしも然らざる事實がある、即ち燐寸の如き其價格の低廉なると個數の多きと燃付好きとの爲め、遠く露國品を壓倒して、到る處我燐寸を見ざる莫きは、其勢力頗る偉とすべきである、次に最も多く需要せらるゝは紡績絲であつて、主として支那人の用ふる所である、絹布陶器漆器及び其他の美術品も相應に賣れ口が好いやうである、是れ畢竟哈爾濱の如き新開の土地に在りては、其紳士として家を構ふる者は、多くは新世帶であつて、且つ旅店料理店及び其他の營業を爲す者、亦悉く新規營業に屬する爲め、室内の裝飾は成るべく低廉にして一時の外見を張り得る條件を必要とするが爲めであらう、次に比較的販路のあるは麥酒殊に朝日、ダイヤモンドの二種であるが、先づ到る處遭遇せらるゝと謂つてもよい、併し上流社會の食卓にも上るや否やは不幸

にして聞き漏らしたのである。凡そ日本商品の特色は其價格の低廉にして外見の美麗なるに在りて、東露地方に於ても一時高價の露國品と競爭して、日本雜貨の露人間にも歡迎せられたる時代もあつたが、其製品の粗惡にして脆弱なる爲め、使用少しく久しきに亘れば、直に破損して金箔が剝落するので、如何なる無頓着の露西亞人も卓子の脇に日本商品の殘骸がゴロ〳〵轉ろがつて居るのを見ては、終に愛想をつかさゞるを得ない、從つて日本商品の顏を見るのも胸糞が惡く爲つて、遂に販路の停塞と爲つて了ふのである、今哈爾濱地方に於ける日本品の割合に歡迎せらるゝは、丁度東露に於ける日本品の第一期の時代を繰り返しつゝあるので、其販路の擴張は大に賀すべきであるが、其擴張されつゝあるは、知らず識らずの間に日本商品の不信用を振り蒔きつゝあるとに想到したならば、我商人たる者、豫め後年の計圖を今日より策定し置かねばならぬのである。

◎哈市の製造業

（見下極めて微々然れども其將來は好望也）

哈爾濱は尙創業の時代であるが爲めに、其工業若しくは製造業と稱すべきものは極めて微々たる狀態に在るが、中に就て其主要なるものを擧ぐれば汽力を用ゆる大仕掛の工場には、木挽所が一個所製粉所が三個所あつて、其製粉所中の二個所は埠頭區に一個所は傅家屯に設けられてある、三個所とも其所有主は露西亞人であつて、規模頗る宏大である。官立の事業としては東淸鐵道の鐵工場がある、主として機關車列車の組立を本業とし、傍ら鐵製諸器械をも造つて居る、此外露人の經營に屬するものには、ウオッカ即ち强度なる酒精分を含有する露國酒の製造所が一個所ある、又煉瓦製造所は郊外處々に之れ有りて、其數も二十餘個所の多きに及ぶけれども、其規模最も宏大なるは市街の西南約四露里なる官立の煉瓦製造所である、併し此煉瓦製造所は目下に於てこそ斯く盛大ではあるが、哈爾濱の創搬期たる建築時代の經

過と共に、自然衰微に赴くべき性質のものであつて、之を以て哈爾濱に於ける製造工業の進歩の標彰と爲すは誤りである、哈爾濱の製造工業が眞に進歩の域に入つたといふには、是非とも滿洲唯一の富源たる農產物の製造、若しくば準農業たる牧畜に伴ふ製造業の振興に在りと謂はなければならぬ、哈爾濱見下の製造工業は此點に於ては尙全然零位下である。詳言すれば哈爾濱の製造工業は今日に於ては遺憾ながら微々たる狀態に在りと謂はなければならぬが、其將來は極めて有望なのである。

◎農業と牧畜

（農產物の豐富、價の廉なる土井の如し）

哈爾濱市の立てる松花江岸の平野は、滿洲中最も肥沃なる部分の一に屬することは、前來屢〻說く所の如くである、併し其土地の廣さに比し、人口の比較的稀薄なるが爲め、未だ悉く耕作せらるゝに至らず、高腴の地、一擲尙鋤犁の痕を留めざるは、最も遺憾の至りであ

る。耕作せらるゝ所の穀物は、物として皆適せざるは莫きが中にも、其最も豊富なるは、哈爾濱より阿什河(アシエヘ)地方に亘りて大豆、小豆、高黍、藍、粟、玉蜀麥が多く、松花江の對岸なる巴彥蘇(バヤンスー)子(ス)地方に於ては特に小麥を多く産出し、哈爾濱市場に聚まるものは、皆此地方から供給せらるゝのである、而して蔬菜類に至つては、最も豊富にして、馬鈴薯、甘藍刀、白菜、葱、蒜、胡蘿蔔、赤大根、蕪、芹等より木瓜、茄子、南瓜、西瓜に至る迄、温帶地方に成育する蔬菜類は、皆此地方にも適當に成長するのである、而して馬、牛、豚、羊及び家鷄の如き家畜も亦能く孳殖し、豚肉の如き其味殊に佳良にして、牛肉の如きも通常烏拉地俄斯德邊りで食する朝鮮牛よりも遙に良種である、殊に其數量の饒多なるに至つては、始めて哈爾濱に至る者の、常に驚愕の目を以て見る所であつて、些末の例ではあるが、一の荷車、而かも煉瓦を百か百五十許りしか積まない荷車を、馬が五六頭もして牽いて居るのを見ても、其數量の如何に豊富であるかといふ事と、飼養に費用を要し無いといふ事とが分る、烏拉地俄斯德邊りで左ういふ贅澤な事を遣つたら、煉瓦の値は黄金よりも貴いとと爲る、實に哈爾濱市の立てる松花江の流域は滿洲の寶藏を以て目すべきである。

◎哈市の人口

(約七萬内外、邦人其百分一に居る)

哈爾濱の人口は予が打算する所にては約八萬人は之れ有るとと相像せらるゝが、今哈爾濱警察署で調査したる露暦一千九百三年五月十五日即ち我卅六年五月廿八日の統計に據ると、其總數が四萬四千五百七十六人である、而して此中最も多くを占むるは支那人にして其數二萬八千三百三十八人、次は露國人にして一萬五千五百七十九人、又其次は日本人にして四百六十二人、其他は墺太利、土耳其、獨逸、英吉利、佛蘭西、朝鮮等の諸外國人一百九十七人にして、合計四萬四千五百七十六人である、併し此統計は實際より少なきは

勿論であつて、現に在留日本人の如き、松花會事務所に於て殆ど同時期に調査したる統計、即ち我六月卅日の在留邦民現在數六百七十一人に比すれば、約三分一の不足であるが故に、其割合よりして四萬四千餘人に其三分一を加へたる計數六萬六七千人は稍〻總口人に近き實數と爲すとが出來る。在留邦民の戸口は、之を哈市總人口の上より見れば、僅に百分一にしか當らぬ位の少數であるが、兎に角清露兩國人を除きて各國中我れに此肩し得る者無きは、稍〻人意を強うするに足る譯である、而して今是等在留邦民中に就きて其職業を區別すれば、戸數に於て商業十五戸、洗濯十五戸、貸席十一戸、木工九戸、理髮八戸、時計及び金細工七戸、醫師六戸で、其他はラムネ及び菓子製造、料理店、旅籠屋、寫眞業、ペンキ及び硝子職、仕立業、鐵工、靴工等である、併し之を人數の上より言へば、貸席が第一で二百十九人、第二が木工で九十三人、第三が商業で六十七人、第四が洗濯業で六十四人といふ具合に

爲つて居る、東露及び滿洲の他の地方に於ける如く、貸席の依然として多數を占むるは、稍〻厭ふべき現象であるが、併し明治政府三十年間の外交失敗といふ大屈辱の前には、是等の醜陋は何等の恥辱にも値せぬので、清濁相混じて兎に角滿洲に我國民的勢力なるものが扶植されつゝあるのである。

◎物價

（烏港よりも著しく低廉也）

哈爾濱の物價は決して低廉と稱する事は出來ないが、旅行者の露領より來りて始めて滿洲に入る者は、誰れしも物價の著しく低廉なるに意外の感を爲すのである、之れには種々の原因もあるが、要するに一般外國品は關稅を徵收せらるゝこと無きと、露國品の或物は本國に於ける製造稅の拂戻を受くると、土地生産の農産物が非常に豊富なるとの三因である、今關稅の徵收を受けざる一般外國品に就きて其物價の一二を擧ぐれば、紅茶一斤廿五哥乃至三十哥（烏港一留乃至一留五十哥）、日本

酒四合入瓶三十哥（烏港八十哥乃至一留）、出來合洋服十二三留乃至十七八留（烏港廿留乃至三十留）等である、次に露國品にして滿洲に輸出せられたる結果として、製造稅の拂戻を受くる爲め、著しく低廉と爲れるものは、主として煙草及び酒類にして、普通クシナレーヴァ會社製の第十一號刻煙草は烏港に於ては一斤に付一留六十哥であるが、此地に於ては僅に一留に過ぎない、スミルノーヴァ會社製造のウオッカ酒も亦著しく低廉であつて、殆ど半價に近き價格を以て購求することが出來る、而して土地生產物にして其數量の饒多なるよりして、市價の低廉なるは、穀類野菜類及び牛豚鷄肉類であつて、小麥の如きは一布度（プード）僅に三十哥に過ぎない、豚肉の如きは一斤僅に六哥である、蔬菜類に至つては殆ど土芥に等しいと謂つてもよい、事情斯の如くなるが故に哈市の物價は之を烏港に比するに、約二割方低廉である、唯だ家賃と薪炭とは烏港よりも却て高價である、是れ新經營中の市街たる、人衆の廣集する

割合に家屋の不足なると、又哈爾濱は四圍皆殺野にして、山地を距ること遠く、從て附近に木材を伐出する適當の山林が無いからである。

◎勞働諸賃銀

（哈爾濱は腕の時代、腕の價は頭腦よりも高値）

哈爾濱に於ける諸種の勞銀及び手間賃は、物價の比較的低廉なるに拘らず、烏港と同じく極めて高價である、是れ其原因たる亦種々にして、一概には言ふとは出來ないが、哈市の經營の宏大なるに對し、勞働者、諸職人の未だ割合に僅少なると、家屋薪炭等生活上必須なる諸品の依然として高價なるが爲めである、今市内に於ける勞銀及び諸工錢の一斑を擧ぐれば、日本人の最も割好き賃銀は石工で、一日三留である、大工の如きも少しく鉋と鋸とを使用することが出來れば、何んな叩き大工でも日に二留は取れる、日本人にしてボーイとして人の家に使はるゝ者は普通十五留で、多少露語を操り得る女子は子守（ニヤーニカ）として露人の家に雇はるれば、

一個月二十留乃至三十留は吳れる、散髮などは東露地方に於て普通五十哥と相場が一定して居る樣であるが、此地では八十哥を要する、日本風呂は烏港と同じく十五哥、洗濯賃は大小に拘らず一個に付十哥である。支那人の勞働賃銀は之を我日本人に比するに大約半額であつて、石工ならば一留五十哥、大工は八十哥乃至一留、ボーイ八留乃至十留である、要するに哈爾濱は倘創痍の時代であつて、最も缺乏せるのが勞力であるから、苟も腕ある者は生活に困難を感ぜざるのみならず、寧ろ腕の價は頭腦よりも高値なりと謂ふべく、多少手職の心得ある者は、先づ喰ひ外づれ無しと謂つてもよい。物價中日常の必須品たる家賃と薪炭とが高價であつて、且つ日本米が一布度四留以上、即ち一斗の米が四圓內外の高値である爲め、我日本人の生活は寧ろ困難の狀態に在りと謂はなければならぬが、收得が斯く相應に多いので、必ずしも苦痛と爲らざるのみか、勤勉と節儉とを以て職業に從事したならば、數

年にして千金の餘蓄を得ることは決して困難事で無い、戰爭の結果は如何に滿洲の情勢を變ずるかは知らぬが、猶額大の天地に齷齪し、日夕汗水を垂らして遂に貧苦と情死するが如き徒は、決然起つて滿洲に赴くべきである。

◎水陸の交通

（哈市は實に水陸交通の連鎖なり）

哈爾濱の地たる、之を陸上の交通よりせば、東淸鐵道の烏拉地俄斯德線旅順線滿洲里（マンチウリヤ）線の交叉點に位し、之を水上の交通よりせば、伯都訥、巴彥蘇子、三姓、ミハイロセメノーフスカヤ及びハバローフスクへの汽船發着場に當り滿洲に於ける人爲的自然的運輸交通上の一大中心として、現時及び將來に於て最も有望なる地位に立つものと謂はなければならぬ。哈爾濱の東淸鐵道停車場は、舊哈爾濱にも新市街にも埠頭區にも、各〻別個の停車場を有し、就中新市街停車場は東西線と南支線との分岐點に當り、其規模の宏大にして經營の雄壯なる、一たび過ぐる者をして魂

魄を飛ばしむる位であつて、滿洲に於ける露國の野心の如何に大に、而して其勢力の如何に鞏固に扶植せられ居るかは、此停車場の規模を見れば、大抵之を推し測るとが出來る、現時當停車場より發着回數は僅に五六回に過ぎ無いが、西比利及東清鐵道の便利が實際に證據立てらるゝ日には、旅客の此線路に由る者の多きを加ふるは自然の結果であつて發着回數も五六回といふ事では利かないが、惜しい事には世人の未だ此鐵道の便利を知らざるのみか、實際に於ても之が證據立てられ無いのは返す〳〵も殘念の至りである。松花江は黑龍江の一支流なるに拘らず、其航運の便利なる事は略ゝ前陳せる所の如くであるが、現時此江上に會社組織を以て營業せる者には、東清鐵道會社川蒸汽船部と黑龍江汽船會社との二つがある、二者共に郵便船であつて東清鐵道會社川蒸汽部は主として哈爾濱より流の航路を支持し下流はミハイロセメノースカヤ即ち松花江と黑龍江との合流點に止まり、黑龍江會社は專ら

哈爾濱より下流の航權を掌握しミハイロセメノーフスカヤを過ぎて遙に黑龍江岸の諸都市へも達するのである、個人の營業者としては約十を以て數ふることを得べく、各ゝ相當の汽船を以て貨物を運送し、江上常に汽船の來往を絶たないのである。

◎其統治機關

（公法上の一大疑問、惡政は人の民を蔑す）

哈爾濱なる尨大の新市街は東清鐵道なる一私立會社の租借地で有らねばならぬ、然るに露國が此一私人の租借地内に於て、僭越にも國家的統治機關を設置し、以て人の人民を支配し人の人民を裁判するが如きは最も謂はれ無き事なるのみならず、明に清國の主權を蹂躙して居るものである。哈爾濱の行政機關といへば一の警察ある許りであるが、此警察署は純然たる露國の官吏によりて組織せられ、東清鐵道會社總支配長ホルワート氏の管轄に屬し、其本署を埠頭區に、分署を新市街及び薩哈爾濱に各ゝ一個所づゝ置いてある、其

取扱事務は普通警察署たる職務の外に、哈爾濱に於ける總べての行政上の職務を行ひ、恰も警察と市廳とを兼ねたる狀あるのみならず、司法事務の一部も混じて居る樣な所もある、人民に營業鑑札を下ろす事などは、露領に於ては市廳に於て取扱つて居るやうであるが、哈爾濱では警察が管掌して居るのである、聞く所に依れは露國には豫ねてより哈爾濱に市制を實施する企てがあるので、早晩事實に爲るであらうとの事である、併し露國如何に專横なりとはいへ一會社而も外國の主權下に立つべき一會社の租借地内に迄立ち入りて、市制を實施するが如き權利ありやは慥に一大疑問である。司法機關としては一個の民事裁判所がある、是れは警察署とは違ひ、東清鐵道會社支配長の管轄下に屬せずして、其裁判官は露國政府が直接任命する所であつて、純然たる露國政府の司法機關として存在して居るのである。斯く露國が一私人の租借地内に迄立ち入りて權力の充全せる國家的統治機關を設置するの不

條理なるは勿論であるが、假し之を正當なるものとするも、其政治は最も亂暴に最も不規律にして、弊竇百出、人の人民を治むるといふよりも、之を賊するといふの却て當れるは實にスラヴ式政治の特色である。

◎必ず起るべき疑問

（露國の財政と外交政略との關係）

哈爾濱に來て先づ吾人の眼底に映射するは其經營の盛大なる事であるが、之れと同時に、吾人の頭腦に浮び來る一事は、あの財政困難なる露西亞に、如何して斯る宏大の事業が出來得るかといふ事である、憶ふに此感想たる翅に予輩一人のみならず、滿洲を旅行する總べてが必ず想起すべき疑惑であつて、我日本の如き僅々一億内外の身代に、其安排方、遣繰方、始末方を苦心焦慮する者には、殆ど人爲以外の力を有するかの如き感じがするであらうが、露國とて別段鬼神にも非ざれば、其爲す所は必ずしも何等の不可思議あるにあらずして、唯だ其手段の巧妙とい

ふ迄である。露國の財政は世界の疑問であるが、仕合な事には其政府の威力の强大なる爲め、尙幾許か財政上の缺陷を隱蔽して、內外の信用を失墜するに至らざるので、此一事は露政府が常に利して以て其の變幻の奇策を弄する所以である。今哈爾濱の經營及び全滿洲に於ける露國の施設も、窮竟此强大なる政府の威力の發作にして、其施設經營には莫大の經費も要るが、そは政府の信用手形、帝國銀行より發行する銀行券で、ドシ〳〵支拂をして行くので、政府から言へば何等の正金をも要せ無いで、人の領土に自國の鐵道が出來、自國の都市が出來、自國の軍隊が駐屯し、自國の商工業が興り、而して遂に全滿洲一圓が自分の物と爲つたらしい有樣と爲つたので、畢竟露國の巧妙なる外侵政策と財政策との統一的活動が、一文の正金無しに六十三萬方露里の滿洲を占有する事が出來たのである。勿論紙幣の發行に就きては、夫々準備金が無くてはならぬ筈であるが、併し露國の遣り方として、果して

有るや否やは頗る疑はしい、準備金無しに紙幣を發行し居るといふ事は、證左の無い事であるから確言は出來無いが、今露國が準備金無しに紙幣を發行したにしても、之が爲めに一國の財政を攪亂する樣な事は無い、何となれば其準備金無しに發行せられたる紙幣は、自國內に留まるには非ずして、外國の領土たる滿洲へ放下せらるゝものであるから、自國に於ては準備金と紙幣との割合は依然として平衡を保つて居るのである、是れもスラヴ式財政策として、露國獨得の特色中に數ふるとが出來る、日本も朝鮮邊りで此流義を試みて見るも、決して損の行く話で無い、少くとも朝鮮人が正金引換を逼つて來る迄は保險附である。

◎紙幣政略の結果

（補助貨の缺乏、露人の奸策）

斯くの如く露國が滿洲の經營に就きては、正貨を使は無いで、單なる紙つぺらで以て仕拂をするので、補助貨たる銀貨及び銅貨すら流通市場より驅逐せ

られて、小貨幣が極めて拂底である。露國の小銀貨は品質極めて粗惡にして殆ど眞錫色を爲して居るもの許りであるが、之を絶對的に價格を有せざる紙幣に比すれば、尙幾分の價値を有するので、吝嗇い支那人などは成るべく銀貨を貯蓄しやうといふ傾があつて、自然に銀貨が流通より遠ざかる結果と爲り、日常の小賣買に非常の不便を感ずるのである、殊に汽車の切符を買ふ時などは、露國人の亂暴なる事驚くべき位で、大抵は小錢の拂底なるが爲めに、否な拂底といふ事を口實にして、拾錢や貳拾錢の剩錢は決して寄越さ無い、亂暴な話であるとは思ふが、多くは急いで居る時でもあるし、且つは滿洲では誰人も多小金廻はりが好いのと、拾錢や貳拾錢の金は何とも思つて居ないとで、其儘に打棄て置く事と爲つて居る。今或物數寄者の勘定に依ると、一人平均十五錢づゝ剩錢を遣ら無いとして、それが毎日五十人あるとすれば一日の利得七圓五拾錢、一個月で貳百貳拾五圓と爲り、我邦で言へば約

三千圓の年俸を取る大官吏の俸給に當るので、之が切符賣一人一個月の定俸外の利得であるとすれば、中々ボロイ話である。露西亞は何を遣つても、總べて斯ういふ寸法に出來て居るので、寧ろ滑稽に類する感じがする。

◎賄賂公行

（然れども專制政治の調和劑也）

露西亞人の賄賂に於けるは、殆ど遺傳性とも謂ふべきであつて、賄賂を取らない者は役人で無いかの如くに爲つて居る事は、今更ら話す迄も無いとであるが、哈爾濱に於ける賄賂の公行は亦格別である、彼の哈爾濱在留邦民間の一大問題として屢〻紛擾を釀したる營業停止問題の如き、亦實に露人が先天的蠻慾の結果に外ならずして、全く哈爾濱の警察署長が賂賄を取る目的の爲めに遣るのである、御大將時々小遣に困まるか、節季前で何か金の必要が起つて來るかすると、直ぐ日本人の商店を閉鎖して了ふ、露西亞でパスハ即ち耶蘇降誕祭といへば、丁度日本の正月

の樣な具合であつて、歳末に各〻新年の用意をする如く、バスハ前には國民競ふて服飾の具より儀式に要する一切の品物を新調するので、普通の商店では一年の利得を全く此バスハ前一週間か十日の間に取つて了ふのであるから、此際店を閉ぢられては一大事といふ處で、ツイ金を出して勘辨して貰ふ事に爲る、何んでも一度店を閉づれば五百圓づゝはボツケツトへ這入つて來るといふ話である、今度の警察署長の如きは、蒞任の當時こそは大人しく裝ふて居たが、何ういふ事を言ひ出すかと思ふと、自分が來てから是れで四個月も經つが、未だ一度も取らないから、貸座敷一軒に付月五拾圓、即ち四個月で貳百圓と、今後一個月毎に幾許(ドレダケ)づゝかを出せと言つて居るげな、哈爾濱の我貸座敷は十幾軒とあるから、一網して二三千は默つて這入つて來る、賄賂も斯う爲つては其性質を變じて一種の稅金の如くに爲つて居る、哈爾濱在住の日本人もう堪へ切れ無いと謂つて大コボシであつた、併し前々の警察

署長の樣に一文も取ら無いで、唯だゲツ々々と八ツ當りのみ遣つて居るのも、亦困まるとの事である。賄賂は効能の方面から見れば、慥に專制政治の調和劑であつて、千金や二千金に易へられない場合が決して少く無いのである、併し哈爾濱の樣にさう虐(ム)ごく遣られては、少しくモルヒネの盛り過ぎといふ所もある。賄賂は露國には極めて重寶な代物であるが、其利害を差引たら、窮竟弊害が多くて、露國上下の腐は皆賄賂に基根して居るのである。

◎國民的急先鋒

(御朱印附の娼樓 日露同盟の貸座敷)

露領に於ても滿洲に於ても、我日本人が展擴を行ふ前には、必ず醜業婦が先きに行つて根據を据ゑ、而して後百工諸商之に伴ふといふ有樣で、醜業婦が實に國民的移住の急先鋒を爲して居ることは、夙に世人の稱說する所の如くである、併し我醜業婦が如何に魔力を有せばとて、萬里虎穴に入りて斯くも勢力を振ひ得るとは、到底出來得べからざる事であるが、實は露西亞政府自

らが之を奬勵保護したる結果、今日の如き素晴らしい勢と爲つたのである。一體東露及び滿洲に於ける露國經營の第一要素として、最も急切を感ずるは勢力であるが、兎に角新事業を起すには人衆を招徠する所以の道に於て遺憾無からしむるとが必要であるといふ所より、第一に我貸座敷業者を歡迎し第二に我洗濯業者を歡迎し、官府より特に家屋を無賃にて貸與し或は薪炭迄も給して手厚き奬勵保護を加へたのが、抑も我貸座敷業の勃興して今日の盛大を致せる重もなる原因であつて、殊に最も滑稽なる話といふのは、北清事變の際には露國の軍隊が多く滿洲に繰込んで來たので、軍隊内に隊附の貸座敷といふのが設けられたげな、其れは殆ど御朱印附の貸座敷とも稱すべくして、家屋を無賃で貸與して呉れる事は勿論、銃劍にて嚴めしく武裝せる番兵迄附して、兵隊共が出掛ける際には、軍隊に行つて先づ切符を購ひ、それを番兵に示して這入るのだといふ事である、若し士官などが長劍悠然としてコ

ツ〳〵出馬して來ると、警護の任に當れる番兵が恭しく銃劍を捧げて敬禮する、御大將極めての滿悦で入來といふ話である、果して事の實際之れ有りしや否やは、見て來た話でも無いから保證は出來ないが、露西亞の遣り方としては眞實らしくも考へられる。で斯る成立と歴史とを有して發達し來れる貸座敷は現時に於ては滿洲の有らゆる總べての地方、少くとも露國の勢力の普及せる稍〻繁華の土地には、必ず二三軒の該營業者があつて、殊に旅順などに於ては石造の大伏魔殿が、甍を並べて建てられてある、此處には日本と限らず、支那と限らず、露西亞も亞米利加も其他の歐羅巴も、皆同一廓を爲して、白鬼黄鬼相競ふて醜怪の共進會を遣つて居る、而して公都嶺（クンドウリン）と稱する哈爾濱と寛城子（クワンチエンズウイ）との中間驛の如きは、日露同盟の貸座敷ともいふべきがあつて、夫なる露西亞人は露西亞の女を出資し妻なる日本人は日本の女を出資し、數多き滿洲の貸座敷中でも一種の異彩を放つて居るといふ事である。

◎哈爾濱を發す

（停車場雜觀）

哈爾濱には十日間滯在したが廿三日の午後一時といふに松花會事務所を辭して停車場に行つた、汽車の昇降に最も骨の折れるのは手荷物の始末であるが、停車場にはナシーリシチック即ち我赤帽とも稱すべき手荷物搬夫が居て、手廻りを運び切符をも買つて與れたので、甚だ好都合であつた。予が本日乘れる列車は、同じく二等室であつたが、前日乘れる所と全く違つて、唯だ普通の三等列車に粗末なる蒲團を敷いた位のものである、西比利鐵道及び滿洲鐵道に就きては、從來世說區々にして、或者は甚しく其完備を激賞し、或者は非常にケチを附けるので、何れが本當か適從に苦しむ次第であるが、それは兩說とも間違つて居ないので、其完備せるものに乘るならば、歐洲の鐵道にも見るとの出來ない立派なものがあり、粗末なものに出喰はしたら、殆ど話にも爲らぬ位に酷ぎいのである、要するに西比利滿洲一貫鐵道は其

延長實に我日本全鐵道の倍以上に相當するが、其れを僅々十年間に完成したのであるから、今日全通はしたものゝ、設備を十分ならしむるといふ迄には猶多少の年月を要するのである、激賞と痛貶とは共に眞事實には相違無いが、極端を主張することは亦た決して東淸鐵道の本面目を說明したものでは無い、哈爾濱で停車中最も厭ふべく感じたのは、乞食物貰の遠慮無く列車內迄入り來る事である、最初四五人迄は憫然に思ひ多少同情も寄せて居たが、豺狼厭く無きの求は露人の先天的特色であつて、一人去れば一人來り、五月蠅きと言はん方無く、鐵道の役人が之を見て居ながら毫も禁制することをしないのである、而して支那人なんかゞ遣つて來ると大きな眼玉で以て鐵拳が直に其頭上に見舞はるゝので、傍人をして坐ろに憤慨の情を起さしむるのである

◎長春途上

（依然たる秦島、風に打たれて濁浪洶涌）

哈爾濱靑泥窪線は所謂東淸鐵道の南支

線なるものにして、哈爾濱を出でゝ以來、全く垂直に南へと指して下だるのである、過ぐる所は依然として空漠たる松花江流域の穀野であつて千里一望、唯だ丈餘に生ひ延びたるカオリャンの、今を盛りと成熟し、風に打たれて搖動又搖動、恰も濁浪の洶湧して大波小波の絶えず寄せ來り寄せ去るかの如き觀がある、併し耕作地の際涯無き割合に、人口の稠密ならざる事は東部線中に觀る所と何等の渝る所が無い。五家（ウーヂヤ）、雙城堡（シウアンチエンプー）を經、拉林河（ラリニ）を渡り、蔡家溝（ツアイヂヤゴウ）といふ驛を過ぐると、日が全く暮れて了つたが、此日遂に山といふ山を見なかつたのは如何に土地の平衍にして廣大なるかゞ證せらるゝ、八時過きに第二松花江（ダーリー）の鐵橋を渡り、十二時頃に寬城子（クワンチエンヅイ）驛を過ぎた筈であつたが、夜中なれば之を目擊する事の叶はざりしは遺憾であつた。寬城子は一名長春（チヤンチウニ）と稱して、伊通河（イートウン）の河畔に位し、北滿洲より吉林（ギーリニ）へ通ずる商業大道路の要衝に當り、滿洲に於ける重要なる市場の一に數へられ、特に蒙古の天

産物を以て支那及び滿洲の製造品に交易する處であるといふので最も著名である。長春から吉林迄は支那里數で二百四十五里だといふから、我邦の里數で約四十里許である、露國が近來此地より東清鐵道の支線を派して吉林へ連絡せしめんと企てつゝあるは、今や隱れも無い公然の秘密である。

◎吉長鐵道

（露國勢力の浸潤此に至り極まる）

吉林長春間鐵道は一時露國が既に敷設に着手したといふ樣な噂もあつたが、實際はまだ其れ迄には捗取つて居ないので、唯だ露國政府と吉林將軍との間に敷設條約の締結せられた事位は事實であらう。元來此吉長鐵道といふのは一昨三十五年の秋頃よりして、之が敷設に關して、露政府と吉林將軍、吉林將軍と清政府との間に數回の往復があつて、露政府が頗る强硬に要請したに拘らず、兎に角清國自らの資本を以て清國自らが經營することに決定して居たので、其敷設費二百何十萬兩といふ

ものも、チャンと出途が決まつて居て、吉林省より八十萬兩、省内の商人より百萬兩、中央政府より八十萬両といふ事に爲つて居たが、嘗に露國藏相ウイツテ氏の東遊に際し、哈爾濱に於ける吉林將軍とウイツテ氏との會見は、圖らずも此確定議に一大變更を見る事と爲り、遂に露政府と吉林將軍との間に敢設條約が締結せられ、吉林將軍から長文の説明附にて草約十六個條の批准奏請を爲したのである、此草約が果して批准濟と爲つたか何うかは知らないが、兎にかく清國自らが敷設すると定まつて居たものが、ウイツテ氏との會見によりて遽かに變更せられし所より、吉林將軍が全く露國に買收せられたのだといふ專らの噂である、之れは勿論事實に相違無い、何んでも露西亞と支那といふ我利々々坊の仕事であるから、其れ位の事は當然である、草約十六個條中に若し北京で愈〻批准が濟んだ時は、東清鐵道會社から吉林將軍へ對して露貨三十五萬留を支拂ふべしといふ事を書いてあるそうだが、

眞逆將軍へ對する骨折料コムミッション迄も條約に依て規定したといふ譯でもあるまいが、中々怪しい性質の金である、露國が多年滿洲に手入れをしたる結果、其勢力の浸潤せると實に斯の如き有樣であるので、滿洲に於ける露國の地位が大抵説明せらるゝのである。

◎四平街以往

（遠山顯然、遼河の白帆、鐵嶺の經營）

二十四日の黎明に公都嶺（クンドウリン）に着いた、民物富庶なる一邑であつて、其停車場には露國が依然として土工を起して居る。四平街（シヒンガイ）へ來ると、遠山始めて東方に顯はれ、たとへ巍々崇高の偉觀を缺くとはいへ、兎に角曠寥の狀を成して久し振りに大陸的地勢の平凡を破つたのである。昌圖府（チヤントウフ）に至ると、山漸く近く、西方には堤狀を成せる小丘が蜿蜒長蛇の如くに連つて居る。開原（カイユテン）を過ぐれば両山益〻相逼つて、鐵路近く遼河の左岸を過ぎて走つて居る、車窓を披いて展望すると、忽ち眼前に露兵の野營かと疑はるゝ灰白色の天幕が、數

限り無く連續して居るので、之を問へば則ち遼河の白帆である、黍正に秀で河岸低く、其水を見る可らず唯だ白帆のみを見る、故に露兵の幕營かと疑つたのである。既にして鐵嶺に着いたが即ち同名の山下に在る百邑である、民家皆粗造なる土壁を以て圍繞せられ、陋矮見るに堪へないが、人口稠密にして戸々鐵器製造を以て生業と爲して居る、是れ鐵嶺の地たる、附近に鐵鑛があるので自然鐵材に富む所から、人民の斯業に從事するとも多く、地名も亦因て以て起つた次第である。昨哈爾濱を出で、以來、過ぐる所の諸驛皆露國の經營盛ならざるは莫きが中にも、鐵嶺は殊に其規模が宏大である。鐵嶺を出づれば山亦漸く遙にして、愈〻南すれば愈〻洞然豁開し、今は遠く松花江の流域を離れて、身は既に遼河の水域中に輸ばれたのである。

◎滿洲の舊都

（頽廢の狀坐ろに遊子の感を絶つ）

滿洲の舊都たる奉天府に着いたのは、

丁度其日の午後一時過ぎであつたが、奉天府に入るに當つて、一見愴然として感慨に堪へ無かつたのは、鐵道が無殘にも奉天府民三百年間の墓地を横斷して居る事である、累々たる饅頭形の幾多墳塋は、是れ誰人の靈魂の宿する所かは知らざるが、綠を爲せる芝生の奇麗に刈り立てられて、府民が遠きを思ひ本に報ゆる所以の誠意の、一日も其懷を離れざる神聖の地とせば、露國たる者、少しくは遠慮すべき筈であるのに、非道此の如きは露國の爲めに密に取らざる所である。汽車を下り、バネ無き奇形の支那馬車に乘り、凹凸せる荒逕を一上一下して、コツ〳〵府城へ向ふといふと、城門外の民家は大抵傾頽して、土塀の崩れた所には、遂々たる雜草、長ずること正に六尺、蟋蟀は秋風の淅瀝として日に老い行くに連れて、唧々として亡國の悲鳴を擧げて居る、哀れさが一入に增さるゝのである、況んや奉天府は既に露兵の撤退したる後ではあるが、屋上の三色旗は、到處翩翻として朔風に靡き、堂々たる

國家宗廟の地を舉げて、恣に他の踐躙に任かすに至つては、遊子をして坐ろに斷腸に堪へざらしむるのである。

◎太廟に謁す

（廟は是れ太宗文皇帝を葬る）

奉天は清朝發祥の地にして、亦宗廟の存する所であれば、奉天に遊びたる者は必ず太廟に一拜すべきである。蓋し滿洲に於て清帝の祖先を葬れる墳塋は總べて三陵ある、即ち一は奉天府を東に距る百五十露里なる興京（シンガンフ）府に在つて、清國が未だ支那を統一せざる以前の祖先を葬り、之を永陵と稱し、二は奉天の東方約十露里に在つて、之を東陵又は福陵と稱し、三は奉天の北方四露里に在つて、北陵又は昭陵とも稱し、實に太宗文皇帝を葬れる所である、三陵中北陵が最も近いので、着の翌朝又支那馬車を驅り往いて一拜したのである。先づ西紅門に下車し、案内者を頼んで入ると、松樹鬱蒼たる間に礎の如き石道が通じて居る、往くこと數百武にして路が十字形に爲る、

右方即ち前山門で之が正門、正門に對し碑樓がある、突兀空に聳ゐて頗る壯觀である、樓中一大碑を安置し文皇帝の德を頌する辭が刻せらるゝ、碑樓の名ある所以である、而して前山門と此碑樓との間は、廣き中庭の狀を爲し、石道の兩側には馬、駱駝、象等の石像が安置せられてある、碑樓を過ぐれば再び中庭で、右方に數棟の堂宇があるが、頽廢既に久しく唯形を存するのみである、左方にも又數棟の建物がある、陵守の住する所にもあらんか、白髮の支那人出で來りて、何事か頻りに物言ひ居りしも、言語通ぜざれば知るに由無し、前面は即ち山陵の在る所で、二十餘尺もあるべき葡萄色の厚き煉瓦塀を以て取卷き、正面に隆恩門といふ一大門が築かれてあるが、常に閉してあるので、山陵は外から見る事が出來ぬ、乃ち又案内者に導かれて此障壁に沿ひて廻くり、後方の一小丘後頂山といふに登つた、下瞰すれば全山陵を一望に收むる事が出來るのである、一拜則ち山を下り再び西紅門に出た。

要するに廟は畫棟彫欄、金碧燦然の美觀は則ち之を缺くが、規制宏壯にして境亦幽靜、自ら森嚴の態を具へて居るのである。開く所に依れば北清團匪の變起るや、露軍先づ此地を占領し、其金銀財寶は悉く之を鐵道にして歐露に運び去つたといふ事である、露人には勿論有らねばならぬ話。

◎現時の奉天

（猶優に號令の地たるを失はず）

清朝盛時の奉天府は、勿論今日には之を觀るとが出來ないが、現時尙滿洲の首都たる以上、壞敗せるながらも多少昔の俤を存し、巍然たる八個の城門及び四個の角樓は高く中空に聳ゑて、遠望には毫も市街の壯觀を減じ無いのである、加之ならず城內の如きも、街路頗る繁盛にして人口稠密、其四平街と稱するは恰も我東京の銀座通りにも髣髴し、店舗軒を並べて熱鬧沸くが如きである、住民は支那の市街であるが爲めに、別に戶口の調査も無く、正確に知るとは出來無いが、予が目算する所

では約二十萬位のものであるが、更に衆眞目に見れば二十五六萬も居るであらう、商人の重もなるは概ね穀物商であつて、獸皮を取扱つて居る者にも亦多少の富豪が居る、主要なる官衙としては奉天總督兼盛京將軍の衙門があつて、禮部戶部工部兵部刑部など稱する形式的の官廳もある、舊時の宮城も今猶存在して、中に金鑾殿、文昌閣など稱する殿堂も伽藍丈は殘つて居る、殊に金鑾殿には當時淸帝の出御あつて政務を覽はせられたる玉座が儼存し、彫鏤蒼然として古色を帶び、俯仰今夕の感に堪へ無いのである、現下の奉天府は、往時の昌盛には迚も比すべきでは無いが、猶優に號令の地として東三省の地を支配するに足るので、露國絕東の策源地たる旅順口にして一旦危急を告ぐるや、則ち退いて奉天に據らざる可らざるにても、略ゝ之を證するとが出來る、唯だ露西亞の根據地としては、其施設がまだ十分で無いので、死守の地は寧ろ哈爾濱に在りと謂は無ければならぬ。

◎滿洲の統治制度

（武斷政治は滿洲を荒廢に歸せしむ）

滿洲の統治制度に就き一言せざる可らざるは、東三省に於ける行政の全く支那本部諸省と異つて居る事であつて、本部の方では總督といふ者が居て、それが文武の大權を握つて居るが、其政治は寧ろ文治的である、然るに滿洲の制度は純然たる軍隊政治即ち武斷政治であつて各省に將軍を置きて軍務知事たる職務を執らしむると共に、奉天には別に奉天總督といふのが居て、それが盛京將軍を兼ね、全滿洲の主宰者たるべき權能を有し、文武の大權を掌握せること、恰も露國の極東に於けるアレクセーイェフ氏の太守たるが如くである、料るに此の如き統治法は全支那中に於ても特種の制度であつて、其行政機關以外に禮部戶部工部兵部刑部の五部を設けたるが如き、全然北京朝廷の制度を模したるものにて、儼乎たる一獨立國の觀を爲して居る、是れ蓋し愛親覺羅氏の明朝に代りて禹域四百州に號令するや、已れ蠻民を以て文明人

を亡し、武力幸に之を威壓することは出來たが、其早晩報復を圖らるべき時期あることを覺悟し、若し萬一の場合に遭遇せば、再び滿洲に退きて東三省丈けを保有せんとの用意に出でたるものである、故に滿洲の大小官吏を任命するや、滿洲旗人の出に非ずば一切之を採用せず、木强の武弁を以て統御の局に當らしめたので、民治に勘能の士を得ること能はず、殖產興業文學技藝等、苟も資つて以て文化の治に補する所以の道に於て久しく等閑に附せられしが爲めに、東三省の地は永く野蠻の蒼態を脫する能はずして、荒廢今日に至つた次第である。

◎撤兵後の奉天

（三色旗城頭に翻飜し、占領の意昭然）

奉天の露國占領軍が一時撤退した事は事實である、併し撤兵したといふは兵隊のみが引揚げたので、露國の勢力は依然として渝ることが無い、三色の旗は城の內外に樹てられて領有の意昭然として明に、永久的建築工事は日一日と

進捗して、勢力の牢乎として拔く可らざるを證據立てゝ居る、殊にコムミッサルといふ露國特派の駐在官が居て、奉天總督を制肘し、全滿洲のナメーストニクたる增祺將軍は恰も其傀儡たるが如くである、コムミッサルの外に尙外務省特派の外交事務官も居て、領事たる職務を執ると共に、裁判事務をも取扱つて居る、半官應半會社の性質を帶ふる者には、鑛山事務局があり炭山事務局がある、而して滿洲內地の到る處に設置せられある露淸銀行及び郵便局は依然として此地にもある、露兵が一時撤退したとて、是れ丈けの機關が尙儼存して居る以上、其勢力の撤兵前よりも幾許か減退せるかの如くに思惟するは汪の骨頂である、況んや一時の撤退に繼ぐに更に再度の占領を以てし、好人物の稱ある奉天總督は今や殆ど幽囚の境遇に在るといふに於ては、撤兵後の奉天は畧ぼ推察に足るべく、而して滿洲が愈〻日露交戈の巷と化せる今日、既に鐵騎の踐躙に委せられ居るとは勿論である。

◎武裝せる全權公使

（將軍御目附役としてのコムミッサル）

奉天の名物コムミッスサルといふのは、露國特派の一官吏であるが、どうも從來譯語が穩で無い、新聞などでは軍務駐在官とか軍務司令官とかいふ樣な風に書いてあるが、其職務よりすれば軍職よりも寧ろ公使に近い任務を帶び、折衝禦侮其手中に在るので、或は武裝せる特派全權公使とでも稱すべきであらうか、何んでも早い所が、將軍を拘束して其一擧一動を監視する役であるから、自分は將軍御目附役といふの或は却て當れるかを思ふのである、原語ではコムミッスサル・プリ・チャンジーニェと謂ふげな、即ち將軍に對するコムミッスサルといふ意義でもあらう。一體此コムミッスサルといふのは、露國外侵政策上最も重要の地位を占むる官職であつて、從來露國が年一年其版圖を開拓して、今日の尨大を致せるに拘らず、曾て一兵に血らざりしは、全く此種の人形を使つて、巧みに其君臣を籠絡したからである。中央亞細

亞邊りでは、此コムミッサルの手で狙ひ落された地方が少く無いといふが、蒙古でも今現に庫倫に此役人が駐在して居るといふ事である。露國の外交の常に變幻測るべからずして虛々實々、屢〻危道を用ゐて、遂に能く今日の成功を致せるもの、畢竟道具建も揃へば役者も揃つて居るからである。

◎露語の勢力範圍

（猶未だ恐るゝに足らず）

自分は最初烏拉地俄斯德を發する際、滿洲は露國勢力の浸潤既に久しきが爲め、言語の如きも露西亞語で決して不便を感する事が無いだらうと思つて居たが、舊哈爾濱に下車して松花會事務所を尋ねた時、何んなに支那人に露西亞語で聞いても、一向に分ら無い、單に日本人といふ詞さへ露西亞語で知つて居る支那人は一人も無い、自分の話し樣が惡るいのでもあるまいかとも考へて見たが、眞逆斯ういふ單純な事を聞くのに間違のある筈は無い、何んでも支那人が露西亞語で返事をしない所

を見ると、全く向ふの者が知ら無いのに相違無いと考へたので、漸く露西亞人の物の分りそうなのを見附け出して、始めて松花會事務所は舊哈爾濱で無くて、埠頭區であるといふ事を知つたことがある。其後奉天に來て、日本人が城廓內に住んで居るといふのでコツ々々城內へ歩を運んだ、又露西亞語で此邊に日本人が住まつて居無いかと尋ねたが、矢張り分らない、少し許り支那語で片言雜りに遣つて見たが、尙更ら分らない、仕樣が無いので支那人の大きな商店に行つて、『那邊的日本人』と書いて見せた、すると向も直に『鐘樓南有日本人』と書いて呉れたので、直ぐ居所を知る事が出來た、同文の國丈けに斯ういふ便利もある。で若し我日本にして果して露人の氣魄を以て滿洲の經畧に從事するでもあらうならば、單に同文の國といふ事許りでゞも其効果を收むるの易々たる事は、決して二倍や三倍の比で無い、目下滿洲に於ける露國の勢力は却々素晴らしい有樣ではあるが、露語の普及に至つて

は必しも其勢力の浸潤と正比例を爲して居るもので無い、我にして取つて代らんとせば、今日が實に其機會であるのである、併し東清鐵道に由つて旅行する者は、其汽車中丈けは露語に非ずば何事も辨じ無いといふ一事を記憶し置か無ければならぬ。

◎滿人懷柔策

（露語學校の設立）

露國は滿洲に於て暴戾到らざる莫しといふ有樣ではあるが、一方に於ては又清人懷柔策として成べく恩威並び行ふ所以の方法に於て頗る苦心慘憺して居るのである、殊に國語の未だ一般に普及せざる一事は、露國が最も痛心せる所と見て、到る處に露語學校が設立されて、露國の士官が其餘暇を以て支那人に露語を敎へて居る、此學校は齊々哈爾（チチハル）にも金州（キンザウ）にもあるが、奉天にも昨年の九月から設立せられて專ら支那人の兒童に露語を習得せしむるを目的とし、傍ら支那の普通學をも授けて居る、兒童の年齢は十五歲以下とし、寄

宿制度を取つて居る、全くの給費生といふ譯でも無いが、月謝は無論徵收せざる上に筆墨料などは支給し吳るゝが故に、先づ半官費の組織である、當時開校日尙淺かりしに拘らず、其收容せる寄宿生徒は三十名內外もあつて、露語は相應に進步の見込があるといふ事であつた、日本邊りならば無論今頃は露探養成所位の名稱が喰ッ附くべき譯であるが、支那人の閑氣さ加減は、之を觀て別段異しま無いのである、併し露西亞にして愈〻滿洲より退か無ければならぬ事と爲らば、斯る苦心慘憺も全く水泡である。

◎滿洲に於ける露兵

（二十萬は蓋し風聲鶴唳のみ）

予が旅行中滿洲にて最も豫想と相反した一事といふのは、滿洲へ這入れば、もう露西亞の兵隊で動けぬ程であるだらうと思つて居たが、實際兵隊はさう多く居ないのみか、極めて少數であつたといふ事である。東部線中で純粹の兵隊を見たのは穆林と牡丹江とであつ

た、哈爾濱には無論混成一旅團の兵は居たが、其れより南へ下つて奉天へ來る迄に、そんなに澤山居る所は一個所も無い、寬城子には哥薩克兵が駐屯じて居たが、それも何百と數へる程に居ない、奉天は當時兎に角撤兵して居たので、唯だコムミッサル及び外交事務官の官衙と郵便局とを保護する衛兵が約百名計り居たのである。奉天以北に於て幾千を以て數ふべき處は、哈爾濱を除けば唯だ吉林のみであらう、吉林は尙露國が全然軍事的占領を繼續して居るので、步騎砲兵を合せて二千五六百人は居る、各停車場の少しく大きな處には、鐵道守備兵といふのが居るが、是れは極めて少數であつて、普通二三十名乃至四五十名で、多きも七八十名を過ぐることは無い。要するに露國が平時より大兵を滿洲に駐屯せしむるといふは、其費擧げて勝ふ可らざるのみならず、滿洲現下の經濟事情は、幾十萬の徒食者を養ふ程に發達して居ないのであるから、滿洲に二十萬も三十萬も兵隊が居ると思ふは大なる間違で

ある、現に昨年露國が歐露より第一回の試驗的大輸送を行つた頃にも、二個師團の兵がチタに來た樣に傳へられてあつたが、實際二個旅團と砲兵の一個旅團とに過ぎ無かつたのに徵するも大抵滿洲に於ける露兵の實數が推定せらるゝのである、一時滿洲の露兵が二十萬などゝ稱せられたのは、畢竟風聲鶴唳に過ぎ無いのである、併し開戰後の今日と爲つては予が旅行の當時よりも著しく增加されたる事は勿論疑ふ可らざる事なるのみならず、亦實際に於ても增加して居るのである。

◎露國經營の炭坑

（撫順炭坑と烟台炭坑）

滿洲には炭坑の所在地は少くないが、現在露西亞人の手で開掘に從事して居るのは、僅に二個所しか無い、即ち一は奉天附近なる撫順の千山臺炭坑であつて、露淸銀行之を開掘し、一は烟臺の炭坑で東淸鐵道會社の經營に成つて居るのである、之を外にして露國は嘗て遼東半嶋の一隅たる瓦房店（ワファンディヤン）附近の炭

坑を開掘した事があつたが、炭質の良好ならざる爲め、其後殆ど廢坑同然と爲つて、今は何等の仕事も遺つて居ないといふ事である。千山臺の炭坑も烟臺の炭坑も、頗る大仕掛に遺つて居る樣であるが、如何に全力を擧げて開掘したとて、まだ却々日本炭を仰が無くとも善いといふ譯には行かない、是れは翌に其産額の未だ多からざる許りでなく、炭質が軍艦に用ゐ得る程の良質のもので無いからである、軍艦用としては、日本炭で無くてはならぬが、戰爭と爲つた今日、日本炭を使ふとの出來無いは勿論英炭さへ出來無くなつたので、露西亞も之れには大凹みに凹んだであらうが、軍艦を港の内に居坐りの儘打潰して了ふ事に爲れば、石炭の心配なんかは寧ろ杞憂に過ぎ無かつたのである、併し金鑛丈けは支那人の名義で露人の密に手を出して居るのは、無論少くないといふ話である。滿洲の鑛物はまだ其存在高が十分明で無いにしても、農作物に亞ぐ一大富源たるとは掩ふべからずである。

◎遼陽の地位

（四通八達の盛區、第二の哈爾濱）

遼陽は奉天から鐵道で南方約三時間程即ち六十二露里の處に在る、其地北は滿洲の首都たる奉天府、西は北清唯一の商港たる牛莊港、南は露國絶東の策源地たる旅順靑泥窪へ通ずる大道路を有し、而して東は則ち鳳凰城を經て義州に通ずる要衝に當り、一下韓半嶋を制し得べき形勝の地を占めて居るので、所謂四通八達の盛區とは之を稱するのである、斯れば露國の此地を重要視せるとは勿論であつて、奉天すら形式的に撤兵はしたが、遼陽のみは頑固にも其守備を廢せず、當時露國の戰時占領軍が尙三千人以上も居つたのである、而して東淸鐵道南支線中に於て、露國が最も經營に力を用ゐて居るのも、亦此遼陽であつて、停車場なども規摸が頗る大きい樣であるし、其附屬の建物も却々多く、中には兵舍と覺はしき宏大の營造物が頻りと建築されつゝあつた、人は稱して第二の哈爾濱といふが、決して誇張の言で無い。遼陽

は古から地形上極めて重要なる處と見なして、遼及び金も都をした事もある樣だし、清朝も奉天に都をする前に四年間も居たといふ事である、現時の城廓は何代に出來たものか知ら無いが、舊態今猶依然として儼存し、盛京省中奉天府に次ぐ都會であつて、人口は約二萬七八千人と註せらるゝ、立つ所の平野は奉天と同じく遼河の水域に屬して、東北には遙に長白山の支脈が取卷き、西南則ち洞然豁開し、雲烟漠々として際涯を見ぬのである。

◎露兵と日本人

（露兵の增減は在留邦民の浮沈）

滿洲は露國の繩張內であつた丈けに、其主人公はといへば、支那人でも無く滿洲人でも無く、矢張露西亞人が橫柄な顏で居坐つて居るので、日本人の如く無勢力者は無論從たる地位に立た無ければならぬのである、從つて滿洲に於ける我日本人の生業は、一に皆露人を中心とし其勢力に追隨して僅に活計を營み得るに過ぎ無いといふ悲しき狀態に在るのは、返す〳〵も殘念の次第

である。遼陽には當時日本人の在留者が百二三十人も居て、其中貸座敷業を營む者が五軒、奉天には撤兵前迄は三戸あつたが、撤兵後一戸は他に轉じて、殘りの二戸すら立ち切れ無く爲つたので、年內には多分遼陽へ引揚ぐるといふ話であつた。一體奉天には人口約二十萬も居て、滿洲隨一の大都會であるから、貸坐敷の一二軒位成り立たぬとは無い筈であるが、如何なる方法を以てしても、支那人の財布を絞るといふ事は、一寸今の處日本人の腕には叶は無いとて爲つて居るので、勢ひ露人の多い處に行つて營業を仕なければならぬとに爲つて居る、是れは翹に貸座敷業許りで無く、有らゆる商工、有らゆる勞働者は皆其通りである、斯る狀態の下に僅に其繁榮を保持し來れる日本人の將來は、今日よりして大に講究を要すべき事であらうと思ふ、何となれば日露の戰爭は全然露國の勢力を滿洲より芟除し盡くすとを爲り、邦民唯一の花客たる露人を掃蕩する結果を生ずるからである。

◎邦民の二系統

（露領の落武者、清國内の漂泊者）

滿洲に入り込んで居る我日本人は、總數既に三千人に近いでもあらうが、今之を進入の經路により色別をするといふと、二樣の系統に大別することが出來るのである、即ち露領より流れ込んだ系統に屬する者と清國方面から漂着した系統に屬する者とである。商人でも哈爾濱に居る者は多くは露西亞系に屬して、營口に居る者は支那系に屬して居る、旅順青泥窪は何ちらかと言へば無論露領の落武者が多い、新聞通信員の如きも亦此傾向あつて、各〻其觀察點を異にして居る樣である。露西亞系に屬する者は成るべく露西亞風を吹かさんとし、支那系に屬する者は成るべく支那風を吹かさんとするのは自然の勢で、互に通がつて居るのも可笑しい。名地の稱呼の如きも、例へば寬城子を呼ぶに、露國系に屬する者はクワン●チェン●ザといへば、支那系に屬する者はクワン●チョン●ツーといひ、公都嶺をクン●ドゥ●リンといへば、一方

にはコン●ツー●リンと言つて居る、横道河子と書いて露國的には ハンタ●ヘー●ザと讀むが、支那系の側から見ると、何處を押したらさういふ發音が出るかと笑つて居る。斯れば滿洲なる實體を研究する上に就いても、支那通は專ら支那の勢力上よりし、露西亞通は專ら露西亞の勢力上よりするので、其觀察動もすれば一半面に過ぎ無いのは遺憾の至りである、滿洲の眞相は是非之を兩面の觀察に俟たねばならぬ。

◎日兵懷望

（旅旅東三省の地を蔽ふ是れ此時）

露國の軍隊に規律の無い爲めに、支那人は到る處其壓虐に苦んで居る、品物を賣つて金の取れない事や、怒鳴り付けらるゝ事や、横頰を打ち叩かれる事などは、もう普通の事の樣に爲つて誰れも異しま無いのである、唯だ滿洲に於ける露國の經營は、財貨を放下すること頗る多大にして、清民生業の唯一の源泉を爲して居るので、表面丈けは從順を粧ふて屈服はして居るが、其實怨

恨骨髓に徹して、時機もあらば報復を圖らんと期して居るのである。左れば日清戰爭の際一たび我軍の仁惠に浴したる老幼男女は、今も其當時を追懐して、露西亞の軍隊が斯う澤山來て居るのに、何せ日本の軍隊が來て吳れ無いのだらうと、頻りに訝かつて居る。昔し湯の征する、北面して征すれば南夷怨み、南面して征すれば北狄怨むといふ有樣であつたが、今や滿洲一千五百萬の黎民、王師を憶ふと亦恰も湯の時の如くである、兵旅此に動きて旌旗東三省の野を掩ひ、以て荒外の民を懐柔するは、今日を措きて復た他に時機が無いのである、

◎牛莊への交通

（大石橋の乘換、營口の隔離）

遼陽から牛莊即ち營口（インコウ）へ行くには、汽車の發着及び乘換が甚だ面倒である。遼陽で荷物列車に乘れば格別、通常の客車に乘つて行けば、大石橋（タシヂヤオ）の乘換が丁度夜の十二時近くと爲り、營口へ着くのが矢張其夜の一時半頃と爲る、而

して停車場から市街迄は、日本里數で一里餘は慥かあるので、不案内の土地を殊に夜分といひ、閉口も閉口隨分閉口した。自分は仕合せにも其乘つて來た客車の中へモグリ込んで、夜の明ける迄寢ることが出來たから善かつたが、さうで無ければ中々混雜をやら無ければならぬ無かつたのである。通常營口へ汽車が着くと、支那人の宿引が各〻提灯を持つて迎ひに來くるそうだが、其旅宿といふのが又非常に遠方で、それに極めて不潔であるといふ事を聞いて居たので、初から宿屋へ行く氣が無つた爲め、別段注意も仕なかつたが、果してさういふ宿引が來たか何うか今は記憶して居ないのである。翌朝未明に汽車の中を這ひ出で、夜來の雨を冒しつゝ、泥濘脚を沒すといふ險惡路を辿りて、牛家屯の埠頭へと着いたのである、即ち營口行の通船發着場である。營口へ行くには斯る不便がある爲め、殊の外旅行者をして不愉快に感せしむるのである。

◎監禁的都市

（營口に於ける露國の軍事的占領）

全滿洲は既に露國の掌中に歸して、今更ら異しむべき譯でも無いが、殊に營口と來ては殆ど捕虜同然である、彼は翌に營口の撤兵をせざるのみか、其海關も其檢疫も其民政も悉皆掌握して、横暴專恣、言語に絶すといふもよい。露國が何せなれば斯る些末の檢疫に迄携はつて、自分で一手に取捌かなければならぬかと言へば、全く檢疫の名に因つて外國の商業貿易を妨害せんとする手段に過ぎないのである、凡そ露國の對外貿易政策は、其自國の商工業を保護せん爲めに、一面には苛酷なる關税を輸入外品に賦課すると共に、一面には其荷物の揚卸や税關手續を無暗に面倒にし、時間と失費と手數との煩に堪へずして、自然露國品に競爭出來ざる樣仕組まれてあるのである、故に露國の對外貿易政策は、之を内から言へば二重の保護と爲り、外へ對しては二重の防禦を施してあるといふ事に爲る、營口の檢疫なども全く此目的に外

ならないのである。予が牛莊に行つた當時、恰もペストの流行最中であつたが、露國は前年ペスト流行の際、其檢疫を厲行せる爲め、非常に支那人の感情を害したといふので、今度は餘程手加減をして居るといふ事であつた、其爲めペスト先生萬歳で日に猛威を逞うする許りである、露國の如き野心家に檢疫を托するなどゝは、抑も危險千萬の至である。ペストと我對牛莊貿易とは至大の關係あるが爲め、其檢疫は最も嚴密を望まねばならぬ。

◎大石橋以西

（吹く所の風は支那的なり）

併し營口に於ては、斯く露國が勝手氣儘を働いて居るとはいへ、大石橋で乘換をして、段々營口に來ると、吹く所の風は全く支那的である、汽車中で支那人の切符を改める時などは、ルースキイ先生、異しい支那語で、票的有々々と言つて來る、既に營口に着きて後は尚更であつて、我領事館なども、全く支那風が吹き荒らして居て、ボーイ、コック、門番より園丁に至る迄、

悉く支那人のみで持ち切つて居る、自分は先づ領事館を叩いて、鈴木サンはと尋ねたが、日本語の解る者は一人も居ない、漸つとの事コツクの中に、半日本半支那的の一人が居たので、始めて分るとが出來た、日本人が日本の領事館に行つてすら尙且つ然りであるから、營口はたとへ露西亞人が占領して擅恣を事とするとも、俄に露西亞化するといふ譯には迚も行かない、併し露西亞人が露西亞の領事館や民政廳に行つて、自國の言語の通せぬ樣な事は毛頭無いであらう。

◎橋莊鐵道

（敷設條約と其處分）

東清鐵道と橋莊鐵道即ち大石橋牛莊間鐵道とは、何と無く別個のものが兩々相接續して居るかの如くである、東清鐵道は兎に角列車も立派に設備も左迄甚しき非難は無いが、既に牛莊線へ乘り換へるといふと、有らゆる點に於て假設物らしい感じがする、其れも其筈、元來橋莊鐵道といふのは、其敷設

當時に於ける露清兩國間の條約に依ると、此の鐵道は東清鐵道中の一部では無くて、營口へ陸揚せられたる東清鐵道敷設用の材料を運搬する爲めの臨時鐵道であつたのである、故に東清鐵道の完成したる今日、同鐵道は何等かの處分無しに打ち棄て置くべき次第のものでは無い、然るに露國の圖々しき、條約の明に之を示すあるに拘らず、人の催促せざるを幸ひに、今尙我物顏に振舞へるは、露人猛けだけしいといふにも程がある。是れはたとへ清國が默々に附するにせよ、我邦たる者、是非とも一と問題と仕なければならぬのである。併し日露戰爭の結果、たとへ東清鐵道を我が手中に收むる事が出來無いにしても、義州から遼陽を經て、牛莊即ち營口に達する鐵道を敷設したでもあらうならば、橋莊鐵道は當然不用のものと爲らねばならぬのである。

◎遼河の航權

（露國木植礦務公司の經營）

遼河には露國木植礦務公司即ち森林會

社の汽船があつて其航權を掌握して居る、勿論航權と稱しても、遼河は名にし負ふ急流で、常に土沙を潰流して、河水黄濁、其汽船の航行し得るは僅に河口より五六十露里の間に過ぎ無いが、森林會社には七隻の汽船を用ゐて其航運業に從事し、牛家屯と營口との間の如きも、毎日汽車の發着毎に數回の往復を爲して居る、併し其利益はといへば、全く皆無である許りで無く、莫大の損失であるのに、森林會社は算盤玉を外にして、犇々と遣つて居る。

此木植礦務公司即ち森林會社とは、近時鴨綠江畔に於ける有名なる伐木事件の森林會社の事で、單に森林會社と譯されて居るが、實は滿洲に於ける伐木、鑛業及び河川の航運權を一手に掌握せんとの、隨分細く無い野心を持つて居る野獸的一會社であつて、其背後の黑幕にはチャンと露西亞の大政府が控にて居るのである。遼河の航運業が目前に損失を見つゝも、斯く落着き拂らつて之が經營に從事し得るといふのは、全く此爲めである。

◎天然的モノポリー

（再び遼河の航運に就て）

遼河は遼河本來の面目よりして云へば、河川としては何等の價値をも有して居ないのである、其流れはといへば極めて急流であるし、水深はといへば滿潮の時で無くば少し大きな船は河口に入ることが出來無いといふ始末に終へぬ河であるが、南滿洲唯一の長流である丈け、從來遼河が滿洲に貢獻せる力は決して鮮くないのである。滿洲の一大富源を成せる大豆は、主として中央滿洲の沃野に生ずるのであるが、若し遼河が無いとすると、之を太平洋岸に搬致して利用の道を啓くといふ事は、到底出來無いのであるが、幸にも遼河は此點に於て天然的モノポリーの好地位を占めて居るので、毎年季節に爲るといふと、支那ヂャンクが幾千と無く上下して、之を遼河の上游九百清里ある大豆の一大集散地通江子より積み取つて、ドシ〳〵牛莊即ち營口へ運び來るのである、其牛莊港が今日兎も角も七萬の人口を有する北清唯一の埠頭と

爲つたのは、一に遼河の惠澤に因れる事は、前既に言説せる所の如くである。

◎穀類運賃の低減

（東清鐵道は必ずしも遼河の敵に非ず）

併し從來遼河の天然に此獨占的好地位を占めつゝありしに對し、最も恐るべき人爲的競爭者の出現とも稱すべきは東清鐵道の敷設である、東清鐵道の敷設に依り、滿洲の富源が二條の通路に由り太平洋岸へ運び出さるゝといふ事實を生じたるのみならず、東清鐵道會社に於ては、尙其上にも滿洲產穀類の運賃を低減して遼河通過の大豆を鐵道に引き附け、併せて營口の繁榮を靑泥窪に奪はんと企てゝ居る、是れ遼河に對して由々しき一大事と謂は無ければならぬ。併し今日に於ては遼河と東清鐵道との輸送力が、非常なる懸隔を有して居るが爲めに、其打擊たる未だ遼河の致命傷たるに至らざるは仕合である。今遼河の輸送力に關する調査の結果に據ると、其開河七個月間に於ける

大豆の輸送力は、三百四十三萬石即ち一千〇二十九萬擔（ピコル）であるから、之を東清鐵道の貨車一輛に付七百プード即ち百九十擔餘を容れ得るものに轉載するとすれば、丁度五萬四千百五十餘輛の貨車を要する譯であるから、每日五十輛の貨車で間斷無く輸送して居るとしても、約三年間の長日月を要するのである、東清鐵道會社が每日百輛の貨車を大豆の輸送にのみ充つるといふ事は、遠き未來はいざ知らず、今日に於ては到底行はれざる事であれば、會社が如何に運賃を低減したとて、之が遼河の繁榮を奪ふなどゝは決して出來得べからざる事である、從つて牛莊其物も鐵道に因て別段逼害を受けざるのみならず、却て滿洲內地との交通を便にした丈けが利益と爲つて居る勘定である。

◎遼河の勁敵

（如何にか帶長鐵道の完成を觀る）

左は言ふものゝ牛莊が未來永劫競爭無き安全の地位に立ち得るものと思考す

るは、終に誤解たるを免れないので、たとへ東清鐵道は現在に於てこそ其輸送力は極めて微々たるにせよ、兎に角遼河に並行して競爭の姿勢を取り居る以上、決して輕々に看過すべき事實で無い許りでなく、もう一つ遼河の將來に對して恐るべき勁敵ともいふべきは、新民屯の鐵道である。此鐵道は畢竟楡營鐵道の支線であつて、河北停車場即ち營口より第三の停車場たる溝帮子（ゴーパンツイ）より岐れて新民屯へ達する百〇五露里（六十七英里）間の鐵道である、楡營鐵道と同じく支那政府の企畫する所で、其敷設工事は既に七八年前より着手せられてあつたが、北清團匪の擾亂に會ふて、工事亦中絶したるも、其後秩序の恢復と共に再び工事に着手し、予が旅行の當時は溝帮子より四十二露里（二十七英里）なる打虎山（ダホーシアニ）といふ處迄開通して居たが、昨年の暮にはもう新民屯迄全通したのである。唯だ新民屯から奉天府迄は目下何等の工事も遣つて居ないが、最初清國政府の設計では、是非奉天府へ接續せしむる考へで

あつたのを、露國の故障に遭つて餘義無く新民屯で止まりとしたのである、左れば露國にして愈〻滿洲で其勢力を失ふ事とも爲らば、清國は直ちに豫ての企畫の如く之が接續工事に着手すべく、清國にして着手せざれば、日本で敷設して遣つても好いのであるから、若し此鐵道にして愈〻完成したる曉には其北清地方一帶の經濟上に及す影響は決して鮮くないのである、詳言すれば此鐵道の完成は一方に是等地方の經濟事情を發達せしむるに効あると共に、一方に或部分の繁榮を奪ふが如き結果を生ずるのである、牛莊の如きは即ち其一例でもあらうか。

◎秦皇島と牛莊港

（北清の商權遂に秦王島に歸せん）

現在水運に由りて滿洲大豆の中央市場と連結されつゝある牛莊港が、將來陸運に由つても直接是等の市場と聯絡するとも爲るならば、牛莊は今日よりも二倍の繁榮を來たさなければならぬ筈であるが、實際さう甘く行かない事

情といふのは、同じ遼東灣内に位する秦皇嶋（シンハウタオ）が脱み付けて居るからである、新民屯から秦皇嶋と牛莊とへは、其距離秦皇嶋の方が約百六十露里許り遠い樣であるが、牛莊は貿易港として二大缺點を有して居る、即ち其第一は牛莊が毎年十一月末より翌年三月に至る迄、港灣全く氷結する事であつて、其二は遼河河口の逐年土沙を堆積して海底を埋むると、潮の干滿が甚しくて僅か十七八呎しか無い足の船でも、干潮の時は遙か沖合に碇泊して潮の滿ち來るを俟つて入港しなければならぬといふ不自由のある事とである。秦皇嶋は此點に於て遙に牛莊よりも優勝の地位に在るが爲め、若し鐵道に由りて大豆が運送せらるゝものとすれば、其れは牛莊へ來たらずして全く秦皇嶋へ行くのである。で今若し遼河を下る大豆が現在三百四五十萬石あるとの計算を基礎として、其中五十萬石が東清鐵道に由つて青泥窪に出で、百萬石が榆營鐵道に由つて秦皇嶋に出るものとすれば、牛莊へ集まる大豆は現在の約半分

と爲る譯である、大豆を以て成立の唯一の要素と爲せる牛莊にして、果して斯の如しとせば、其繁榮亦二分一すべきは當然である、總ずるに牛莊の將來は予輩の見解にして誤まらずとせば、好望なる運命よりも寧ろ衰運の前程に向つて歩一歩を進めつゝあるのである。之に反し秦皇嶋は港灣としては何等價値無しと雖も、勃海灣頭唯一の不凍港なると、豁開せるながらも其棧橋へは幾千噸といふ大船巨舶が優に横附けせられ得るとの爲め、將來北清の商權を左右する者は、必ずや秦皇嶋であらねばならぬ。

◎牛莊貿易の現況

（日米最も優勢を占む）

併し牛莊の將來は兎も角、現下の貿易は極めて好況なる狀態に在るので、全清國中上海、天津、廣東、漢口を除けば、外國貿易の盛、一も牛莊の右に出づるもの無く、現時の輸出入總額實に四千二百萬兩を以て算せられ、内輸入二千五百萬兩、輸出一千七百萬兩にし

て、翹に北清唯一の商港たる實力を有するのみならず、清國中優に外國貿易市場の重鎮を以て許すことが出來るのである。今是等輸出入中に就き、如何なる貨物が牛莊に輸入せられ、如何なる貨物が牛莊より輸出せらるゝやを見るに、輸入にては綿布第一、綿絲第二、其他は雜貨及び古鐵石油類であつて、是等は主として支那人の需要を滿たすべきものに屬し、歐米人向の貨物は重もに青泥窪より輸入せらるゝのである、牛莊の有らゆる總べてが何と無く支那的であるのは、其商業貿易が全く支那人を中心として活動して居るからである、而して今此輸入品の大宗たる綿布は何れより供給せらるゝやといへば、萬里波濤を隔てたる太平洋對岸の米國より運ばるゝので、綿布許りで以て輸入總額の約半分に近いのである、米國が滿洲問題に頗る躍起の態度を取つたといふのも、畢竟斯る密接の利害關係を有して居るからでもあらう。輸出品の主要なるものは世人も知る如く、大豆、豆油、豆糟であつて、大豆

及び大豆製品のみで、全輸出額の四分の三以上を占めて居る、之を外にしては若干の柞蚕絲及び金、獸皮があるが、固より大豆の盛に匹敵すべきものでない、而して今此輸出品の主なる買手は何國なりやといへば、米國が牛莊を以て滿洲貿易發展上の唯一の華客と爲し居るに反し今度は日本が牛莊の得意先と爲つて居るのである、再言すれば輸入に於ては米國之が覇權を掌握し、輸出に於ては日本其首位に居るので、牛莊の貿易は窮竟日米両國により

て左右せらるゝものと謂つてもよいのである。

◎遼東半島に入る

（滿目荒涼、邦人の滿洲を値踏せるは是れ）

牛莊には五日間滯在したる後、再び鐵道に由り大石橋に出で、東清鐵道を青泥窪へと南下した。大石橋の乘換は依然夜中であつたが、第二回目であるが爲め、以前の如くには困難を感じ無かつたのである。大石橋より遼東半嶋へ入る迄は、夜中の事とて別段に見聞す

る所も無いが、翌朝目を醒ました處が丁度瓦房店(ワフアンデヤン)であつた。瓦房店は前にも陳べたる如く、炭坑の所在地であるが、最早此地方は遼東半嶋内に入ると深く、卒然眼を擧ぐれば、光景全く前來經たる所と趣を異にして居るのである、滿洲の内地は到處空漠たる平野であつて、たとへ鬱蒼として樹木の繁茂せるは無きにせよ、一面に穀物を以て蔽はれ、生意勃動の色は到る處に見受けらるゝのであるが、既に遼東半嶋に入れば、滿目皆石山のみに非ずば、黝色を帶べる赤裸々の地であつて、左迄土地の豊饒を要素とせざるカオリャン即ち高黍すら、此地方に於ては全く瘠せこけて、僅に四五尺にしか伸びない、滿目唯だ荒涼といふは、實に遼東半嶋の光景である、我日本人が滿洲の値踏みをしたのは、何んでも斯ういふ所を標準に取つたものに違ひ無い。併し平衍なる滿洲内地を旅行して、一たび遼東半嶋に入れば、地勢著しく急促し、險山峻峰峭礫して起り、海水亦犬牙の如く出入し、其秀拔にして而も曲

折ある風光は、旅行者をして一方ならず壯快に感ぜしむるのである。

◎所謂關東州

（全滿洲は關東州に非ず）

唯だ漠然に遼東半嶋といへば、地理學上の一名稱に過ぎないので、區劃も自ら判明を缺くが、露國の所謂關東州(グワンドウンスカヤ オブラスチ)といふのは、清國との租借條約に依り、範圍顯然として自ら一定し、復た租借地の範域を踰越す可らざるとは當然である。今其條約に依り之が區劃を具體的に示せば、大凡皮子窩(ピズワイヴオ)と普蘭店(プーランデヤン)とを連ねて東西に引ける線より以南の半嶋と、之に附屬せる諸島即ち海洋島(ハイヤン)、長子島(チヤンズワイ)、長山島(チヤンシアン)、王家島(ワンデヤ)、古其島(グルー)等の島々を併せたるものであつて、其地積は決して廣いものでない、而して又此租借地より北方即ち蓋平(ガイピン)、岫巖(スユヤン)、太洋河(タイヤンホー)を連ねたる結合線へ到る迄は、中立地帶の名稱下に置かれて、此處には露清兩國とも居民を准るさぬとか、中立地域は清國の管理に屬するとか、清國は露國に照會後に非ずば軍

隊を同地域内に入るゝことが出來ないとか、色々の規定も存して居るが、其詳細は何れ予が著作中なる「滿洲總覽」に讓る事として、要するに露國の租借地即ち關東州といふのは、畢竟遼東半島南部の一小區域に過ぎ無いのであるが、露西亞は世人が滿洲に關する智識の缺乏、殊に我邦の如き寛大なる東洋平和の監視者あるを利し、今は其區域をさへ蹂躙して、滿洲一圓が關東州即ち租借地であるかの如くに振舞ひ、何んでも勝手氣儘を働いて居る、而して我邦民亦此事に關して毫も尋究を須ゐず、ボンヤリとやつて居るのは、畢て一たび我王土たりし遼東半島に對して、忠實からぬ仕打と言はなければならぬ。

◎半島の咽喉

（金州城此に立てり、要塞無雙）

普蘭店、三十里堡（サンシリーブウ）を經ると、次なる大停車場が金州（キンヂオウ）である。此附近は遼東半嶋中に於ても、最も狹窄せる地方であつて、半島の咽喉を以て稱されてゐる。日清戰役で有名なる金州城は停車場の西北約三露里の處に在つて、車窓から其城廓を望むことが出來るが、之を遼陽城などに比したら固より比較にも爲らぬ位に微々たるものである。金州に於ては滿洲の他の市府に於て見るが如く、依然露兵の跋扈甚しく、當時約一個聯隊の駐屯兵が居た。總ずるに滿洲の撤兵といふのは形式のみに過ぎ無いので、中には遼陽の如く圖々しく構へて居る所も無いでは無いが、兎にかく其兵數は世人の傳ふるが如く多勢のものでは無い、併し一たび遼東半島に入るといふと著しく增加して來て、全半島悉く兵であると謂つても善い位である、自分は今回の旅行に於て三たび金州を通過したが、其最後の時の如きは、丁度陸軍大演習の折とて、金州城外より南關嶺（ナニングアニリン）へ掛けて、露兵の野營を張り居る者が、山に滿ち谷に溢るといふ勢で、銃劍の閃く光、軍馬の嘶く聲、鐵騎の蹴立つる沙烟、山嶽を震動せん許りの礮響、それはそれは素晴らしい勢で以て混雜を遣つて居た、其れ

も其の筈、何んでも滿洲撤兵といふのは、形式的に引揚げた部分は、畢竟遼東半島へ引き入れといふを意味して居るので、狹い遼東半島の邊端へ一時に繰り込んだ事とて、平生ですら兵隊の垣根を成して居る位であれば、こう演習の時などは尙更の事である、何んでも租借地の露兵は步騎砲工等各種の兵員を併せて三萬と稱せられてあつた、併し滿洲全體の露兵は、世人が稱說する如く多勢で無い事は、前既に說く所の通りである。

◎大連灣と青泥窪

（二者を混同する勿れ）

大房身（ダフアンシエン）へ來るといふと、此處は微々たる寒小の一驛に過ぎ無いが、恰も大連灣市（ダリヤニワニ）へ至る鐵道の分岐點に當るので、交通上比較的重要の意味を持つて居るのである。大連灣市といふのは大連灣の北岸に建てられたる露國の新市街であつて、淸國の舊市街たる柳樹屯の事である。大連灣市と青泥窪（ダーリニイ）とは、國音の稍〻相似て居る所から、邦人中には動もすれば此兩者を混同して、大

連灣市と青泥窪とを同一視する者が鮮くないが、其實決して同一の地では無くて、青泥窪は同じ大連灣の內には在るけれども、大連灣市は北岸に、青泥窪は其南岸なる通稱ヴィクトリヤ灣に在るのである。旅大租借條約の「旅順口大連灣の兩處は地勢險惡なるを以て、露國は自國の費用を以て砲臺營寨を建造し、及び一切地方を保護する爲め擧辨すべき事件は露國の酌行に由るべし」とあるに依れば、大連灣市が立脚の基礎は全く軍事上に在りと謂ふべく、從つて青泥窪が通商貿易の爲めに開放せられて、何等の防備の施されざるに反し、大連灣市は嚴めしく武裝せられ、砲臺も魏然として立てば、守備兵も二個聯隊は居る、併し日本人の在留者は割合に多からずして、約四十名內外しか居ないと云ふ話である。

◎旅順口と青泥窪

（政權の移動と其盛衰）

大房身の次は南關嶺といふ停車場である、別段大きな停車場でも無いが、旅

順線青泥窪線の分岐點に位して、其狀況は大房身と同一の地位に在るのである。一體東清鐵道は是迄旅順線の方が本線であつたが、先年藏相ウイッテ氏が東方視察の折、青泥窪を以て絶東經略の主もなる策源地と定めてより、青泥窪線の方が本線と爲り、旅順へ向ふ者は一旦青泥窪に立寄り、再び迹戻りをして行くといふ二重の時間を費さ無ければならぬのである。彼の東清鐵道會社汽船部の本社が、旅順より青泥窪へ移されたのも、全く此際であつて、何んでもウイッテ氏年來の考案は、青泥窪を以て北方亞細亞の上海とし、歐洲より東洋に來り、東洋より歐洲に至る有らゆる旅客及び貨物の呑吐口とし、經濟上の有らゆる主力を此に集中して、平和の手段といふ美名の下に、スラヴ的大野心を達ふせんとしたのである。此點に於ては現極東太守アレクセーイェフ氏は大々的の反對者で、自己の根據とせる旅順に牙城を搆へて、もうチツと露骨に其本來の進取政略を發揮せんとの志願であつた事は、

世人の夙に唱道せる所の如くである、左れば此二大策源地の運命を各〻其一身に繫げる両勢力家が權力の消長は直ちに此二地の盛衰に影響し來るは自然の勢であつて、最初旅順の絶東に於ける軍事的策源地として經營の開始せらるゝや、遼東半島の繁榮は一に旅順に集中して、我商工業者及び勞働者の入込んだ者が却々多かつたが、ウイッテ氏東遊の結果として、青泥窪が東亞經略の中樞と爲るや、人心の趨向一時に急變し、旅順の商人輩は續々青泥窪へ移轉し來り、密に其將來を夢みて滿洲の上海を以て我も人も期して居たのであるが、卒然ウイッテ氏の轉官と爲り尋でアレクセーイェフ氏の極東太守として旅順に據り陸海軍に號令することと爲るや、青泥窪は忽然落莫し、繁榮再び旅順に移つて今日あるに至つたのである、アレクセーイェフ氏の政治的生涯の終らざる間は、旅順は兎に角絶東經略の根據地として繁榮するに相違無いが、外海から山越しに砲丸が投げ込まるゝ樣に爲つては、其運命は之をト

するに難からざるのである。

◎青泥窪の偉觀

（ウイッテ氏半生の苦心想見に足る）

人の遼東半嶋に遊び、滿洲の門戸を窺へる者の歸來談といへば、必ず青泥窪市の規摸の宏大なる事であつて青泥窪の宏大を言はずば土產話と爲らない位に思はれて居るので、自分も如何許り大きいであらうかと種々想像を描いて行つたが、既に哈爾濱の盛に魂魄を飛ばしたる予れには、左迄の感覺を與へ無かつたのは自分ながらも稍〻奇異の感じがするのである。併し其土工の大約竣成して市街の整然として秩序を爲せる事や、道路の修平にして坦々として車馬を驅るに便なる事や、煉瓦若しくば石造の新家屋が軒々相屬して鱗次せる事や、或は大きな烟突の中央發電所があつて、其れより電氣が四方に引かれ、暗黑の滿洲、野蠻の滿洲、罪惡の滿洲が、丁度毒婦の粉粧を施して奇麗に着飾れるが如く、燦爛たる電光により不夜城の觀を現じて居る事なぞを

見ると、斯る文明の市街は東露及び滿洲の何れに至るも到底目視し得べからざる偉觀であつて、藏相ウイッテ氏が半生の苦心は流石に沒却すべからざるものがある、殊に況んや其突飛なる歴氣樓的の新市府が、厘に最近數年の間に於て山を鑿し海を埋めて、忽然として現出したる其速力を思へば、洵に驚嘆の外は無いのである、青泥窪の規摸は到底哈爾濱に及ばないとしても、其偉觀は之を沒するとが出來ないのである。

◎旅順口の武裝

（露國絶東の新策源地）

予の青泥窪に來たのは慥か九月の卅一日であつて、其青泥窪を去つたのが十月の十日であつた、其間出入五日間も遼陽に遊び、又一日は旅順を見物したのである。旅順青泥窪間は汽車路で丁度六十露里即ち我十五里許りであるが實に三時間といふ愚なる時間を要するのである、青泥窪は兎に角平和を假裝して其一切の施設が經始せられたのであるから、其市街といひ、其埠頭とい

ひ、其建築といひ、總べて露西亞流に隨分思ひ切つた素晴らしい遣り方であるに拘らず、尙其中に幾何か平和の氣象が看取せらゝことであるが、旅順と來たら初から軍事上の設備を基礎として經營せられたのであるから、目に觸るゝ總べては悉く殺伐の光景のみである、殊に予の旅順に行つた日は丁度第三次期撤兵の當日即ち十月八日であつた爲めに、人心頗る動搖して臆想百出、種々附會な風說をも耳にしたが、併し今日と爲つては餘り笑ふべき事柄でも無かつたのである。先づ旅順に入るには、背面防禦の爲めに築かれたる椅子山案子山の砲台がある、旣に汽車を下りて市街に入れば狹隘にして而も不規律に迂餘屈折せる市街に、人馬雜踏して熱鬧言はん方無く、彼處の廣場に建築材料の堆積せらるゝがあれば、此處の平地には石炭の丘阜を成せるがあり、倉庫には麥粉が入り切らずとて雨露に暴らされて山積するのもある、而して港內の浚渫工事は大に步を進め西方の最も淺くして干潮の際徒步にて

涉たり得たる場所は、今や吃水廿呎もある船舶が自由に碇泊し得ることゝ爲り老虎尾半島附近にはもう立派な戰鬪艦が幾隻と投錨して居るのを見た、又新市街には廣さ三十サージェンに深さ廿呎もある長渠が開鑿せられて居る、而して旅順の一大工事として、旅行者の膽を奪ふものは、老虎尾半島の地峽開鑿であつて、之が愈ゝ成就する曉には二條の通路を以て外海に通ずるのである。旅順といひ靑泥窪といひ、總べて遼東半島の地は、百戰碧血の餘、實に我皇土の一部分を組成したるものであつたが、露國の忠言に依り東洋平和の爲めに非ずとして之を還附したのに、露國の圖々しき、己れ却て之を領有せるのみか、斯く公然諸種の軍事的設備を行ひ毫も憚る所なきは、實に言語同斷の話である、併し日露の戰爭は是等の非理不道を膺懲すべき天刑にして、殊に戰爭の結果遼東半島が再び我手に戻るが如き事もあらば、それは最早取立得べからざるものと諦らめて居た貸金に、利子迄附けて返して貰ふやうな

譯であるから、何んでも露西亞がドシ〳〵金を投じて、折角勝手の施設經營を遣つて呉れるのが、今と爲つては我邦の無上の仕合なのである。

◎安東縣と大東溝

（黄海に於ける二新開港場）

從來牛莊の開港により遼河流域の門戸丈けは開放されてあつたが、黄海に瀕する地方即ち鴨綠江畔一帶の地は、天與の富源の横れるに拘らず、永く門戸を鎖して毫も其開發に力を致さなかつたのは遺憾の至りである。併し客冬の改締に係る日清通商條約米清通商條約に依りて、奉天府と共に安東縣及び大東溝の二港が開放されたのは將來滿洲の開發上尠からざる便益を得ると爲つたのである。此安東縣と大東溝とは共に鴨綠江口の樞要なる商業地であつて、安東縣は鳳凰城、寛甸、懷仁、通化等の諸市場の要衝に當り、同地方より輸出せらるゝ、大豆、雜穀、柞蠶繭、麻、煙草、藍、藥草等は一旦皆安東縣に聚まりて、然る後四方に轉送せ

られ、又此地方へ輸入せらるゝ金巾、石油、雜貨なども、皆一たびは此地を經るのであるから、安東縣は實に鴨綠江右に於ける一般貨物の又と無き集散地である。大東溝は等しく其商業市場たるより言へば其重要の度は毫も安東縣と徑庭は無いが、其存立の事情が全く違つて居る、即ち大東溝は鴨綠江畔唯一の富源たる材木の專門的市場であつて、其前面二三哩の間に横れる遠淺は、實に天與の材木置場を成して居るといふ事である、それは何ういふ次第かといへば滿潮の時は、一二尺の水はあるが、干潮の時は見渡す限り一面の干潟と爲り、江上より流がし來る筏も、一たび此干潟に達すれば決して流失の憂が無いからである、左れば大東溝の遠淺は船着の爲めには、不便此上無くして、支那ヂャンクすら滿潮の時で無くば、港へ這入ることが出來ないのであるが、材木商賣の爲めには至大の便利を有して居るので、遠淺といふ不便が實に大東溝の商業地たる唯一の要素と爲つて居るといふ不思議の現象で

ある、安東縣と大東溝とは距離に於て殆ど三十哩内外に過ぎ無いのであるが、それが同時に開港されたといふのは、全く斯る事情の下に存立の要素を異にして居るからであらう。此安東縣と大東溝とは予が今回旅行中の通路で無かつた爲めに、此話は自分の目擊談では無いが、此兩地は黄海に於ける二新開港場として滿洲と最も密接の關係を有するとと爲つたが爲め、人の話といふのを其儘書き綴つて置いたのである。

◎平和の侵略機關

（東清鐵道と露清銀行）

滿洲の話を終るに當り、尙一つの遺るべからざる重要事といふのは、滿洲の平和的侵略機關たる東清鐵道會社と露清銀行とである、此一會社一銀行は共に三國干渉の成功より來れる一大産物とも稱すべくして、名は一私人の經營に屬するが、其實露清兩國が政治的野合の結果に外なら無いので、而も其清國が此二大經營に幾許かの參與を有して居るといふのは、全く名義許りであ

つて、其實露西亞政府が一手に搔き廻はして居るのである、鐵道とひい銀行といふ、其名は如何にも平和的である、而して露國は實に此文明の利器に由り、最も險惡にして戰慄すべき野心を滿たさんとしつゝあつたのである、否寧ろ平和の名に因つて既に幾たびか東邦動亂の誘因を爲し、遂に日露今日の不祥事を惹起したのである、故に佛人ゲラール氏は嘗て其著「大々的露西亞」に於て、「東清鐵道會社は表面上一私立會社に過ぎざれど、是れ假面のみ、露國の陸軍省は北京に接近すべき秘密的軍事鐵道を敷設せんの念あるや久し、即ち此東清鐵道會社を傀儡とし其慾望を滿したる也、露國は實に其帝國主義を進行するが爲めには私立會社をも利用する也、否私立會社の假面を被りて迄も其帝國主義を實行するもの也と云ひ、而して露の一新聞記者ワシーリイェフ氏は露清銀行烏拉地俄斯德支店長エプシティン氏より旅順及び牛莊に於ける同銀行の重もなる事業として、支那帝國の土地を購入する事と露

國海陸軍の會計たる事との證言を得平生惡しざまに露清銀行を攻擊したるワシーリイェフも、驚くべき迅速の前進を爲しつゝありとの一語を以て感嘆を禁じ得なかつたのでも、概ね此妖怪なる二會社の實體を說明することが出來るのである。

◎東清鐵道

（彼は露國陸軍省の機關也）

西比利大鐵道當初の設計は現後貝加爾鐵道を延長し黑龍江に沿ふてハバロフスクへ連結せらるべき筈であつたが三國干涉の報酬として滿洲を橫斷することと爲つたとは、世人の夙に熟知する所で、其滿洲內に露國の手で敷設せられたものが即ち東清鐵道である。此東清鐵道は松花江岸なる哈爾濱を中央大車停場とし是より丁字形を成して三方に分岐し、其西向露本國に向ふものは滿洲里驛迄が八百八十五露里、其東走烏拉地俄斯德に到るものは、グロデコヴォ迄が五百二十八露里、而して其南下して遼東半島に行くものは、靑泥窪

迄が八百八十一露里、之に旅順南關嶺間大連灣大房身間及び大石橋營口間等の所謂支線を合算すると、延長實に二千三百六十四露里と爲るのである。此宏大なる鐵道の營業者は、東清鐵道會社といふ株式組織の一私立會社であるので、戰爭を遣つて之を占領することが出來るか何うかといふ樣な問題も起つて居るが、前述ぶる如く私立會社とは名義許りで其實露國陸軍省の機關であるとは、最早掩ふ可らざる事實である、從來邦人の東清鐵道に由り滿洲を旅行せんとするや、或は其通行を阻止し若しくば軍事探偵として之を牢獄に投ぜるに徵するも一私立會社の行爲に非ざる事は勿論である、東清鐵道會社は鐵道事業の外、又汽船業をも營んで居る、即ち一は東清鐵道會社附屬汽船部にして一は松花江川蒸汽部である、汽船部には宏大なる船が十幾隻とあつて、旅順口と清國諸港、旅順口と長崎烏拉地俄斯德間、烏拉地俄斯德と韃靼海峽オコツク海諸港との航路を支持し、松花江川蒸汽部には河航用汽船、曳船、

傳馬船等を備へて松花江嫩江の漕運に從事して居るのである、併し是等の汽船業は露政府の保護下に立つに拘らず其事業は鐵道の如くに、成功して居ないのである。東清鐵道會社は又銀行業者として大に爲す所あらんとしたが、之れは全然失敗に終つたので、其嘗て發行したる青票白票即ち兌換劵は、人民之を通貨として通用することを嫌へる爲めに、今は全く市場に其影をだに留め無く爲つたのであるといふやうに傳へられて居る。

◎露清銀行

（彼は露國大藏省の機關也）

露清銀行は一千八百九十五年十二月十日露國皇帝の勅許に依り、六百萬留の資本金を以て開業したものであつて、表面上兎に角一個の特許銀行にして、東亞各地に於ける貿易取引の圓滑を期するに外ならずとは稱するもの丶、其實露國大藏省の機關であつて、此機關により東清鐵道の財政は支配せられ、西比利及び滿洲の發達が企圖せらる丶のである、故に或者は露清銀行を以て

或意味に於て英の香港上海銀行と拮抗すべきものであるといふが、露清銀行は露國の領土内に於て獨占權を有して居る丈け、それ丈け英國のに比して怪力を振ひ得るのである、露清銀行の本店は露都彼得堡（ペテルブルグ）に在つて、其開業の翌年に上海、漢口、天津、及び烏拉地俄斯德に支店を開設し、一千八百九十八年には旅順口及び哈爾濱にも支店が設けられ、爾後其活動部面の次第に發展すると共に、支店及び出張店は東亞の要所到る處に設けられ、滿洲内地のみにても支店四個所（營口、旅順口、青泥窪、哈爾濱）、出張店十三個所（遼陽、奉天、鐵嶺、公都嶺、開原、寛城子、吉林、齊々喀爾、海拉爾、横道河子、琿春、伯都訥、寧古塔）の多きに及んで居るのである、露清銀行が滿洲に於て如何に勢力を有するかは此一事でも分る、聞くが如くば奉天總督增祺氏の如きは露清銀行より尠からざる負財があつた爲め、ツイ露國藥籠中の物と爲つたのであるといふことである、此點に於ては露清銀行は最も冷酷なる高

利貸である、今露人ワシーリイェフ氏の著書中に就き同銀行の權能とも稱すべき事項を擧ぐれば、「露清銀行は發行權を有し、兼て支那に於ける租稅徵收の取扱、北京政府の認諾を經たる貨幣の鑄造、支那の國債に對する利子の支拂、鐵道電信敷設の特許、及び支那政府の國庫の經濟上に關する諸般事業に就ての委任を有すとあるので、大抵其業務の一斑を知ることが出來るのである。

滿洲の話終

明治三十七年四月二十四日印刷
明治三十七年四月二十八日發行

定價金貳拾五錢

著者　稻垣伸太郎　東京市本郷區臺町三十九番地
發行者　關喜三郎　東京市小石川區原町十五番地
印刷者　宮村作次郎　東京市日本橋區瀨戸物町六番地
發行所　白山黑水社　東京市本郷區臺町三十九番地
印刷所　大和屋印刷所　東京市日本橋區瀨戸物町六番地

不許複製

◉露國前大藏大臣（現大臣會議長）ウイッテ氏監修

◉露國大藏省原圖◉日本稲垣伸太郎譯補增訂

再版 滿洲地圖

▲縱二尺一寸横一尺八寸▲銅版彫刻着色五度摺

▲印刷鮮明裝釘堅牢▲滿洲及附近要地里程表附

◉折本製……正價金六十錢（郵税一部金弐錢）

近時滿洲地圖の世に行はるゝ者汗牛充棟も啻ならず、然れども其多くは鹵莽杜撰、翅に粗略にして實用に適せざるのみならず、誤謬滿紙、一も信憑に足るもの無く、甚しきは十數年前に成れる古版を庫底に索めて、総に潤色を施し、以て世人を欺瞞せんと

す。是を以て其稱して最新といふ者、毫も滿洲見下の形勢を審にするに足らず、重要なる都市は其位置を誤り、楡營鐵道の一支線たる蛩民鐵道は略せられ、露國絶東の策源地たる青泥窪と大連灣との如き亦混淆して同一處とせらる、是れ地圖人を導く指針に非ずして、却て人を誤る者、害や豈恐れて怖れざるべけんや。夫れ見下の滿洲は十年前の滿洲に非ず、露國一たび擅に滿洲を領有して以來、魏然たる歐風の都市は到處に勃興し、蜈蚣として長蛇の如き鐵道は東西に敷設せられ、沼澤を拓き山丘を鑿して此に坦々たる車道の通ずると共に、蛛網の如き電線は縱横に架設せられ、滿洲の形勢、刻一刻に變遷して、今は復た昨の狀態を留めず、則ち滿洲地圖なる者、彼の庫底の幽囚者を起して、換骨脫胎、以て再度の勤務に服せしむるが如き、焉くんぞ得て滿洲地圖の滿洲地圖たるに在らんや。

本社此に觀るあり、嚮に第二次期撤兵に際し、時局の必ず今日に到達すべきを看取し、密に世人の參照して、眞に**信憑に足るべき完全の滿洲地圖**を編輯せんの意あり、偶〻**露國前藏相ウイッテ氏の監修に成れる露文滿洲全圖の最も精確にして據て以て製圖上の參考に資する**に足るを聞き、一たび其原本を覩んとを欲し、書を露都の社友に致し、速に之を郵送せんとを以てす、月餘を起にて始めて到る。乃ち取て之を一展するに、山川城邑の布置より鐵道電線道路及び金銀鐵石炭の諸坑、若しくば寺院、墓地、井の所在、土地の高低、海水の淺深に至る迄、**細大を網羅して毫も遺漏ある莫く、滿洲の形勢、一目瞭然、之を掌中に指すが如し**、乃ち大に其珍帙を得たるを喜び、始めて之を基礎とし滿洲地圖の編輯に着手せり、是れ實に昨卅六年六月の交なりき。

蓋し露國の滿洲に垂涎せる一日に非ず、故に其佛獨を語らひて三國干涉を我に行ふや、露人は既に北滿洲の地を踏査して、仔細に鐵道線路を測定し、干涉の報酬に由り之が權利を獲得せると共に、直に其敷設に着手したりしなりき、爾りしよりして後露國の滿洲經營は、殆ど之を自己の領土視して諸般の設備を行ひ、財を費する幾億、勞苦亦尋常に非ず、而して**前藏相ウイッテ氏は滿洲の平和的經營者として、半生の心血を濺ぎ、其調査は最も周到の用意**を以てせらる、故に世界中滿洲の事情を知る者露國に如くは莫く、露國中に於ても其大藏省は殊に滿洲通を以て稱せらるゝ所以なり、則ち其藏版に係る滿洲地圖の**最も精確にして、完全宇**

内に匹無き固より其所也。左れば一千九百年始めて此圖の第一版を公にするや、未だ半月ならざるに倏ち一萬部を賣盡し、爾後二版三版を重ね、四版五版六版を刊行する、從つて出づれば從つて盡き、**僅々一個年半にして版を重ぬる事十六回、發行部數實に三拾萬部**の多きに達し、學者政治家より以て實業家に至る、苟も滿洲に多少の注意を拂ふ者、爭ひ競うて之を購はざる莫く、殊に陸海軍人に在りては、上將校より下士卒に至る迄、一人として之を所持せざるは無く、陸海軍大學、士官學校、各特科兵學校の如き、亦皆教科書とし或は參考書として採用せらるゝに至れり。夫れ平和論者の頭腦より編出せられたる地圖の、今則ち却て主戰論者の孵化場たる陸軍諸學校に講說の資料と爲る、事洵に奇なるに似たれども、而も此圖の**如何に精新詳密にして其應用の範圍の如何に廣大**なるかは以て概察するに足れり。一千九百二年には恰も**藏相ウイッテ氏東遊の擧あり、滿洲踏査の結果、更に重訂して大に增補修正を行**はんとの意ありしを以て、重版且らく中絶せしが、歸來歲餘を經て成れる者、即ち**訂正增補第十七版滿洲全圖**にして、本社が**露都**より**接手せる原圖**は**實に此最新の滿洲圖**なりき。

然れども本社は單に之を飜譯するを以て足れりとせず、**完全中にも尙其備はらんを期し**、同年九月**譯補者自ら滿洲に入り、實地を踏査し、其親しく目擊せる所に據りて幾多の訂正を加へ**、且原圖の三百五十萬分一なりしを改めて**三百十五萬分一**とし、更に多年北清地方に在りて最も**滿洲の事情に精通せる某將校の校閲を經**、刻苦約一年にして頃者始めて成を告げ、發售以て遍く天下に布くの運に至り、平生の宿志始めて酬ゆるを得たるもの、本社の密に自ら快とする所也。則ち左に本圖の**十大特色**を擧げ以て坊間に流布する尋常一樣の地圖と大に其撰を異する所以を明にし以て江湖諸君子の鑑察を仰がんとす。

特色 其一

内容豊富

本圖は滿洲の全部を包含するは勿論、東は露領烏蘇里地方より、南は京城、山東の一角に及び、西は北京より蒙古の一部に亘り、北は露領後貝加里州、黑龍州に至る一帶の地を抱括し、縱二尺一寸横一尺八寸の間に地名合計一千六百九十餘所を含めり、内容の豊富蓋し天下獨歩。

特色 其二

實地踏査

露國前藏相ウイッテ氏の監修に成れる同國大藏省出版の原圖を基礎とし、且つ譯補者自ら實地を踏査し之が增補訂正を行ひ、又北清地方の事情に最も精通せる某將校の校閲を經たる事は、既に本文說く所の如し、則ち本圖の精確にして、國民の據て以て眞個に信憑に足るべき完全地圖たる、誰か復た一點の疑を挾まんや。

特色 其三

精新無比

既に最新の原圖を基礎とし、又最近の踏査に依り編輯す、則ち其地圖の精新なる固より論亡し。彼の既成瑩民鐵道を記入せるが如き、新民廳を新民府と爲せるが如き、若しくば烏蘇里鐵道中の改稱驛は悉く新舊兩名を擧げたるが如き、是れ我邦の地圖に無きは勿論、亦露國の原圖にも無き所。

特色 其四

譯音正確

外國地名を邦語にて記載するに當り、最も困難を感ずるは、原音を正確に表はすと是れ也、然れども本圖は成るべく原音に遠ざからざらんことを期する爲め、其記載法は最も周到の用意を以てせり、即ち鳳凰城（フォン・ホッアン・チェン）、岫巖（スュ・ヤニ）等の如き、其苦心の存する所、以て見るべし。

特色 其五

用字妥當

從來邦人の露語に若しくば滿國の地名を記するや、用字極めて區々、故に其妥當を缺くものは一々之を訂正せり、即ち浦潮斯德を烏拉地俄斯德（我參謀本部出版西比利地誌の用語に據る）哈爾賓を哈爾濱（清國の公文書に據る）、ダルニーをダーリニイ（露國の原語に據る）と記載せるが如し、餘は類推すべし。

特色 其六

清露併記

滿洲は實際に於て清露兩勢力の錯雜混淆する處、從ひて地名の如き、皆多少の稱呼を異にせざる莫し、故に清露兩名を存して對照に便せり。唯紙面の狹隘なると支那地圖の參考に足る者無きが爲め、其重要の地に止めて、他は則ち之を略せざる可らざりしは深く遺憾とする所、君子其意を諒して可也。

特色 其七

戰地必携

戰地に於て將校の携帶すべき地圖は自ら備はるべしと雖も、本圖の軍用として最も參考の價値あるは、其地名を悉く露西亞的に記載せるに在り、是れ敵情偵察の際、若しくば捕虜を獲たる場合等に於て、露名を以て記せる地圖を携ふるの、兵要上極めて便益多ければ也、發音の特に正確を期せる蓋し此故。

特色 其八

明鮮刷印

銅版彫刻は最も熟練なる刀工の鐵筆に依り其精巧を悉くし、印刷亦着色五度刷と爲して、專ら鮮明と美麗とを期せると、實に卷頭附する所の見本刷の如し。唯見本の紙質は稍ゝ脆弱なりと雖も、眞圖は舶來の堅靭なる模造紙を用ゐ、殊に特製は局紙の優品を擇びたれば、印刷の鮮明なるは勿論、能く永久の使用に堪へて、毫も決裂の患を見ず。

特色 其九

牢堅釘裝

戰地用旅行用としては最も携帶に便にして、且つ裝釘の堅牢を要す、故に其容積は成るべく輕小にし、自在にポッケットよりの出入（ダシイレ）に便じ、之を覆ふに堅靭なる表裝を以てし、日夕展卷するも決して破損の患無く、使用上最も便利と實用とを期せん爲め、其寸法は縱六寸横三寸餘の疊本に仕立たり。

特色 其十

里程附錄

既に地圖ある、則ち里程表亦缺く可らず、是れ表紙に附するに、滿洲及び附近重要地の里程一覽表を以てせる所以なり。覽者地圖を展觀して、併せて里程表に及ぶ、則ち要地の距離を知るに於て、單に三百拾五萬分一の定尺に由り其概略里數を知る外、更に正確に其距離を知ることを得ん。

◎遼東半嶋……近刊……正價金五錢 郵稅金貳錢
井上藥村著

◎滿洲に於ける日本人……近刊……正價金五錢 郵稅金貳錢
稻垣水莽著

◎長白山と黑龍江……近刊……正價金五錢 郵稅金貳錢
井上藥村著

◎西比利の氣候……近刊……正價金五錢 郵稅金貳錢
稻垣水莽著

◎ムーアムールスキイ半嶋……近刊……正價金五錢 郵稅金貳錢
井上藥村著

明治三十七年四月

白山黑水社

世評一斑

白山黑水社滿洲全圖一出、世皆噴々其精新無比を言はざる莫し、乃ち左に世評の一斑を掲げ、以て本圖の價値を證せん。

◎日本……（三月三日）

由來滿洲地圖の正確なる原圖は寔に得易からず、目下世に行はるゝものゝ如きは概ね粗莽なる舊地圖を基とし加ふるに机上の空想を以て之を潤色したるものに過ぎざるが故に其誤謬ある事元より怪しむに足らず、然るに此滿洲全圖は露國前藏相ウキツテ監修の下に輯製せられたるものを原圖となし尚ほ稻垣氏が多年の研究に依り幾多の重要なる修補を之れに加へたるものなるが故に其正確なる事は論を待たず、一度之れを繙かば山川城邑の布置より、鐵道線路、鑛山の所在、土地の高低、海水の深淺に至る迄滿洲の形勢は一目の下に瞭然たるべし、附すに重要地域の里程表を以てす、時節柄何人も一本を坐右に備ふの要あり。

◎日本人……（三月五日）

本地圖は、曩に西比利交通大地圖を著し、精新にして且つ正確なる良地圖を供給したる稻垣伸太郎氏の著はす所、露國前藏相ウイツテ氏監督修正の下に成れる露文滿洲全圖を根基とし、之を增訂するに著者自身の實地蹈査を以てしたるもの。ウイツテ氏の原圖は既に精確無比、宇内に冠たるの稱あるに、更に加ふるに著者自身實地踏査の結果を以てす、其の幾十を以て計へらるゝ滿洲地圖中に在りて、最も精確にして且つ最

戸水博士書翰

拜復貴著滿洲全圖御惠贈被下難有、誠に立派に出來上り時節柄極めて有益なるものと相信じ候。新民屯と「カオバンツ」との間の鐵道も御記入相成、眞に最新の名に背かず、右鐵道は素是奉天迄延長する考に有之趣の處露國の故障に逢ひ之を新民屯に止めたる樣聞及候、今回日本人引揚の際にも此鐵道により生命を全ふするを得たる者鮮からず、然るに大抵の地圖には此線路記入無之候。加之貴君の地圖は他の場所に關しても其位置甚だ精確なるが如くに候、古き地圖を胡魔化して用ひたるものに在りては、「ニングタ」の位置すら間違たるもの往々有之、殊に外務省編纂と稱する民友社の地圖には秦皇嶋を眞の嶋として記せるが如き最も笑ふべく候、貴君の地圖には一として此の如き不都合無之、御骨折の段奉察候、右御禮のみ草々頓首。

三月二日　戸水寛人

稻垣伸太郎樣
侍史

新のものたるは言はずして瞭かなり。試みに現時坊間に行はるゝ多くの滿洲地圖を採りて比較するに、夫の重要なる都市の位置を誤まり、若くは檢營鐵道の既成支線たる鄭民鐵道を脱漏し、若くは青泥窪と大連灣とを混淆せる如き誤謬は、皆な本地圖に在りて正だされざるなく、其の他譯音の正確なる、用字の妥當なる、清露の兩地名を併記したる、滿洲各地及び附近要地の里程表を添へたる、即ち是れ本地圖に見る所の特色にして、實に他の地圖に全く缺く所たり。今や日露交仗の結果として、滿洲は久しからず兩國用武の地と成るべきの時に際し、精確無比なる本地圖の發行されたる、依りて實際に益する所決して尠少に非ざるを信ず。

◎東京朝日新聞……（三月十三日）

本地圖は露國大藏省に於てウキツテ前藏相監修の下に調製したるものにして、稻垣伸太郎氏之を譯寫せり、原圖は一千九百年の調製に係り、數次版を重ね、更にウキツテ氏が東遊の際實地踏査をなし增補訂正したるものといふ。滿洲地圖中最も正確にして最も細密なるもの、本圖を措いて他に求むることなかるべし。

◎萬朝報……（三月二十八日）

日露戰記滿韓地圖の類紛々として世に出づる何ぞ多きや、然れども多くは際物的製作

にして一も信憑に足るなく、就中地圖の如きは四十餘種の多きあるも孰れも誤謬甚しく、假令ば露國極東の策源地たる青泥窪と大連灣市とを混淆同一所とし、或は檢營鐵道の鄂民支線を略せる如き、人を導くの指針却て人を誤るの恐れなしとせず。本圖は露國前藏相ウイッテ監督の下に成り、夙に精確無比と稱せらるゝ露文滿洲全圖を根基とし、且つ譯者自から實地踏査して增訂したるもの、山川城邑の布置、土地の高低、海水の深淺より旅大租借地の境界、並に同條約に依りて成れる露清中立地帶區域に至る迄、精細漏さず、殊に譯音正しく清韓の兩地名を併記し里程表を添たる如き、今日に在ては滿洲地圖中の第一とすべく、一たび之を開展せば滿洲の形勢歷々指點するを得へし、想ふに滿洲の原野は近く日露兩國用武の地たる可く、本圖の如き實際に臨んで稗益する所多かるべし。

◎實業の日本……（四月一日）

露國の前藏相ウキッテ氏監修し、露國大藏省の發行したる原圖を、稻垣仲太郎氏の譯補增訂したるものにして、縱二尺一寸横一尺八寸、印刷鮮明、携帶輕便、此種出版物中の最良なるものなるべし。

◎大坂朝日新聞……（四月十八日）

近時滿洲地圖の世に行はるゝもの汗牛充棟も啻ならず、然れども其多くは鹵莽杜撰、翅に粗略にして實用に適せざるのみならず、誤謬滿紙、殆んと信憑するに足るものなし、若し完全なる地圖を求めて而して得ざる者本圖に對せば、夫れ或は渴望を醫せらるゝを得ん、原圖は露國前藏相ウキッテ氏の監修に成れるものにて最も精確なりとの定評あり、殊に千九百二年ウキッテ氏東遊の後更に大に增補訂正を加へられたれば、譯者は最新の第十七版を得て以て原本と爲し、尙自ら實地を踏査して幾多の訂正を加へ滿洲の事情に精通せる某將校の校閲をも經たる由なれば、殆んと間然する所なきを見る、其最も驗著なる特色を擧ぐれば、譯音の正確なる、用字の妥當なる、清露兩名を併記せる、印刷裝釘の鮮明斬新なる等にて、附錄には里程表を以てせり、軍用缺くべからざる指針なるべし。

97
141

長白の山、黑龍の江、今や戰雲暗澹として、平和の何れの日に定まるを期すべからざるも、而も我國民的一大發展地の、實ふ此間ふ存せざる可らずとする、則ち邦民たる者、今よりして深く慮る所無きを得ず。諸同人曾て久しく此地に在り、其事情ふ於ける、研究聊か一日の長を以て任せり、乃ち社に名づくるに白山黑水を以てし、進取的帝國の將來に對し、微力自ら揣らす、敢て策畫の借を冒さんとす。其事業の如き、漸次之を發表すべきも、志や豫め江湖の諒とせんを望む、

明治卅七年四月

白山黑水社同人

97
171

97
171

026692-000-8

97-171

満洲の話

稲垣　伸太郎／著

M37

ADD-0386